

姫路市

丁・柳ヶ瀬遺跡Ⅱ

都市計画街路網干線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21(2009)年3月

兵庫県教育委員会

姫路市

丁・柳ヶ瀬遺跡Ⅱ

都市計画街路網干線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21(2009)年3月

兵庫県教育委員会

例 言

1. 本書は兵庫県姫路市勝原区に所在する、丁・柳ヶ瀬遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は都市計画街路網干線道路改良事業に伴うもので、兵庫県西播磨県民局姫路土木事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が平成10年度に本発掘調査を実施した。
3. 出土品整理は兵庫県中播磨県民局長の依頼を受けて、兵庫県立考古博物館が平成21年度に実施した。
4. 本書に使用した方位は国土座標（第Ⅴ系）の座標北を示す。ただし座標値は道路改良用の数値である。また、標高値は東京湾平均海水面（T.P.）を基準とした。
5. 出土品の分析は、土器の胎土分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
6. 地図は、図版1：国土地理院「姫路」1/200,000
図版3：国土地理院「網干」1/25,000
図版4：姫路市基本地形図「姫路市基本地形図」
を使用した。
7. 執筆は、第4章をパリノ・サーヴェイ株式会社が行った以外は篠宮 正が行った。
8. 編集は篠宮が行った。
9. 本書にかかる写真・図面などの記録や出土した遺物などは、兵庫県考古博物館に保管している。
10. 発掘調査および報告書作成にあたり、
姫路市教育委員会・姫路市埋蔵文化財センターの各機関および、
秋枝 芳・大谷輝彦・小柴治子・多田暢久・中川 猛・森 恒裕・山本和子・山本博利
の各氏にご援助・ご指導・ご教示頂いた。記して深く感謝の意を表する。

丁・柳ヶ瀬遺跡Ⅱ

都市計画街路網干線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

例 言

目 次

第1章	遺跡をとりまく環境	1
第1節	地理的環境	1
第2節	歴史的環境	2
第2章	調査の契機と経過	5
第1節	調査に至る経緯	5
第2節	発掘調査の経過	6
第3節	出土品整理	8
第3章	発掘調査の成果	9
第1節	確認調査の成果	9
第2節	本発掘調査の成果	9
第4章	自然科学的調査の成果	16
第1節	丁・柳ヶ瀬遺跡出土土器の胎土分析	16
第5章	まとめ	30
第1節	要約	30
第2節	遺跡の範囲	31
	報告書抄録	34
	図版	1～14
	写真図版	1～20

挿図目次

第1図	各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)(2)	22・23
第2図	胎土中の砂の粒径組織(1)(2)	24・25
第3図	碎屑物・基質・孔隙の割合	26

表目次

第1表	分析試料一覧および胎土分類	16
第2表	薄片観察結果(1)(2)(3)(4)	18~21
第3表	丁・柳ヶ瀬遺跡出土土器一覧	33
第4表	丁・柳ヶ瀬遺跡出土石器一覧	33

図版目次

図版1	遺跡	1 兵庫県の位置 2 姫路市の位置 3 丁・柳ヶ瀬遺跡の位置 (1/200,000)
図版2	遺跡	丁・柳ヶ瀬遺跡周辺の主要遺跡一覧
図版3	遺跡	丁・柳ヶ瀬遺跡周辺の主要遺跡 (1/25,000)
図版4	遺跡	丁・柳ヶ瀬遺跡の本発掘調査区と既往の調査区の位置 (1/4,000)
図版5	遺跡	確認調査と本発掘調査の位置 (1/1,000)
図版6	遺構	東半上層遺構平面・断面 (1/100・1/40)
図版7	遺構	西半上層遺構平面・断面 (1/100・1/40)
図版8	遺構	下層遺構平面 (1/100)
図版9	遺構	土坑 SK01 (1/10)・SK02 (1/20)
図版10	遺構	溝 SD09・SD05・SD06・SD07・SD11断面 (1/20)
図版11	遺構	溝 SD04・SD03・SD02・SD08・SD10断面 (1/20)
図版12	遺物	上層遺構・包含層出土土器 (1~25)
図版13	遺物	SD12出土土器 (26~40)
図版14	遺物	石器 (S1~S3)

写真図版目次

写真図版1	遺跡	1 丁・柳ヶ瀬遺跡周辺 遠景(真上から) 2 丁・柳ヶ瀬遺跡 遠景(真上から)
写真図版2	遺構	3 上層全景(西から) 4 上層全景(南から)
写真図版3	遺構	5 上層西半(西から) 6 上層柱穴群 検出状況(東から) 7 上層柱穴群(南から)
写真図版4	遺構	8 土坑 SK01 検出状況(南から) 9 土坑 SK01 断面(西から) 10 土坑 SK01 土器出土状況(西から)
写真図版5	遺構	11 溝 SD01 断面(西から) 12 溝 SD08 断面(北東から) 13 土坑 SK02 断面(西から)
写真図版6	遺構	14 溝 SD09 断面(東から) 15 溝 SD05 断面(北から) 16 溝 SD06 断面(南から)
写真図版7	遺構	17 溝 SD04・SD03 断面(南から) 18 溝 SD10 断面(南から) 19 溝 SD07 断面(南から)
写真図版8	遺構	20 下層全景(西から) 21 下層西半(東から)
写真図版9	遺構	22 溝 SD12(東から) 23 溝 SD12(南西から) 24 溝 SD12 断面(南から)
写真図版10	遺物	SK01・SD01・SD04・SD05・SD06出土土器
写真図版11	遺物	SD07・SD08・SD09・SD02・柱穴・包含層出土土器
写真図版12	遺物	SD12出土土器(1)
写真図版13	遺物	SD12出土土器(2)
写真図版14	遺物	石器
写真図版15	分析	土器胎土薄片(1)
写真図版16	分析	土器胎土薄片(2)
写真図版17	分析	土器胎土薄片(3)
写真図版18	分析	土器胎土薄片(4)
写真図版19	分析	土器胎土薄片(5)
写真図版20	分析	土器胎土薄片(6)

第1章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境 (図版1・3)

丁・柳ヶ瀬遺跡は兵庫県姫路市勝原区丁に所在する。姫路市は兵庫県の中西部に位置しており、南は瀬戸内海に面し、南東は高砂市、東は加古川市、北東は加西市、北は神崎郡福崎町・市川町・神河町、北西は宍粟市、西はたつの市と揖保郡太子町と接している。丁・柳ヶ瀬遺跡は姫路市の西端の大津茂川の流域左岸に位置する。

太子町を含む揖保平野は、中国山地の東端を構成している播但山地を大きく刻んで南流する揖保川、林田川、および独立した小規模河川である大津茂川の流域に当たる。町域の北西部には西播山地があり、火成岩からなる独立丘陵も散在するが、大部分は揖保川の氾濫原である平野部が続いている。

高橋学氏の研究によると、これまでデルタ性平野あるいは氾濫原とされてきた揖保川下流域の平野部は、かなり起伏に富んでおり、扇状地的性格を有する。ただし、詳細に見ると、揖保川下流の左岸域は盛んに河川の氾濫堆積を受けて形成された扇状地状である。

揖保川下流の左岸には、馬山・壇特山・朝日山などの基盤岩の突出が認められる。これらの独立丘陵は、8,000万年前から6,500万年前にかけて、流紋岩の山塊が揖保川本流の堆積作用によって埋没したために生まれた地形である。これらによって本流の影響を受けず、埋没を免れたと考えられる大津茂川の河谷が平野の東端に位置している。

揖保川下流左岸の扇状地はたつの市日銅を扇頂として南へ低下して行くが、標高4m～5m付近を境として、下流では海岸に平行して延びる微高地群とそれらに挟まれた凹地群の卓越するデルタ的性格が強くなっている。揖保川下流域の低地は三つの地形面に分類されており、それらは大きな地形面が二つあり、0.5 m～2mの崖によって限られている。そして低位のものが氾濫原面であり、今も地形の形成が続く沖積面に当たる。高位のものは完新世段丘面であり、洪水が及ぶことはほとんどなく、及んだとしても積極的な地形の形成は行われることがなく、条里タイプの土地割りが広がっている。

完新世段丘面を細分すると、現在の集落や耕作地が立地することが多い微高地と帯状に長く延びる凹地をなす旧河道、いずれにも属さない平坦地からなっている。これらのうち旧河道は、ほとんどのものが現在の流路と比べ東向きの網状の流れを有し、川島付近で旧揖保川もしくは旧林田川が大津茂川に合流していた。微高地はこれまでの分類では自然堤防とされてきた部分であるが、大礫から小礫で構成されている場合が多く、中州として形成されたものと考えられる。また、平坦部は小規模な旧河道や旧中州が氾濫堆積物で埋められたものと考えられる。以上のことから、完新世段丘面もかつては扇状地として形成されたものであることがわかる。

低位の地形面である氾濫原は河川の影響のみで形成された自然堤防帯と、海と河川が形成に関与した三角州帯、海によって形成された砂堆帯に細分される。自然堤防帯は完新世段丘面と氾濫原面の境界が形成された後で発達した新しい地形である。

海成層の分布は揖保川沿いでは姫路市下余部付近、大津茂川沿いでは姫路市田井付近までとなっている。また、海進にともない低湿化した場所に堆積したと思われる層は京見山南麓から姫路市宮田・坂出付近まで広がっている。したがって、縄文海進時の海岸線は現在のT.P. 4m～5m付近に位置していたと考えられている。

第2節 歴史的環境（図版2・3）

丁・柳ヶ瀬遺跡は姫路市の西部に所在する。今回中心となる遺構と遺物は弥生時代と古代である。したがって、丁・柳ヶ瀬遺跡周辺地域の弥生時代と古代を中心に前後の時代も含めて時代ごとに概観する。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡はたつの市碓岩南山遺跡で調査が行われている他は、他の時代に混入した石器や採集品である。碓岩南山遺跡では2群に分かれた石器類ブロックが始良Tn火山灰より上層で検出された。太子町坊主山遺跡からは国府型ナイフ形石器と有舌尖頭器が出土している。太子町広坂向池遺跡でナイフ形石器と尖頭器、太子町原新池遺跡でナイフ形石器が採集されている。

2. 縄文時代

縄文時代は、草創期や早期の遺跡の調査は行われていない。前期の遺跡はたつの市片吹遺跡で前期末の土坑を検出しており、中期・後期・晩期にかけて継続している。中期になると遺跡や遺物量も増加し、太子町平方遺跡で竪穴住居や土坑・ピットを調査し、石棒や石鏃などの石器や土器が多量に出土している。このほか丁・柳ヶ瀬遺跡や太子町城山遺跡で土器が出土している。後期になるとさらに遺跡数は増加し、太子町東南遺跡・たつの市片吹遺跡で竪穴住居を調査しているほか、太子町川島川床遺跡・太子町平方遺跡・太子町城山遺跡・たつの市舍利田遺跡などで遺物が出土している。

晩期は丁・柳ヶ瀬遺跡・太子町川島川床遺跡・太子町東南遺跡・太子町立岡遺跡・太子町助久五反畑遺跡・太子町平方遺跡・太子町城山遺跡・太子町常全遺跡・たつの市門前遺跡などで土坑や遺物が出土している程度で竪穴住居は検出されていない。

3. 弥生時代

弥生時代遺跡は、弥生時代前期後半から始まる遺跡は丁・柳ヶ瀬遺跡があり、数少ない。むしろ弥生時代中期初頭から急増している。太子町平方遺跡で竪穴住居を検出しているほかは、太子町東南遺跡・太子町鶴遺跡・太子町斑鳩寺遺跡・たつの市門前遺跡などが存在し、門前遺跡などからは縄文時代晩期の土器も出土している。

中期中葉から後半はさらに遺跡数は増加し、(仮)高田区整遺跡・太子町川島遺跡・太子町山田遺跡・太子町亀田遺跡・太子町鶴遺跡・太子町立岡遺跡・太子町城山遺跡で竪穴住居を検出している。太子町川島川床遺跡では絵画土器が出土している。高地性集落として、太子町檀特山山頂遺跡があり眺望が良い。墓は川島遺跡で方形周溝墓4基と円形周溝墓1基を検出している。

弥生時代後期は中期から継続する太子町川島遺跡・太子町亀田遺跡・太子町立岡遺跡・太子町南柳遺跡で竪穴住居を検出しているほかは、たつの市片吹遺跡・たつの市門前遺跡・太子町茶屋ノ前遺跡・太子町蓮常寺北遺跡などがある。墓は太子町常全日蓮寺遺跡で土器棺墓4基を検出している。

4. 古墳時代

揖保川下流域左岸の前期古墳の首長墓は、大津茂川流域に系譜をたどることができる。丁・柳ヶ瀬遺跡調査地の北東に位置し、低地に立地する丁瓢塚古墳が最古であり、丘陵上の壇特山1号墳、壇特山3

号墳、鷲山古墳と続いている。首長墓ではないが古墳時代初頭の太子町黒岡山墳丘墓や山戸4号墓で調査が行われている。太子町松田山古墳は竪穴式石室に割竹形木棺の埋葬施設を持ち、斜縁二神二獸鏡・銅鏃・筒形銅器などを副葬している。

中期の古墳は現在のところ、確定的な首長墓がほとんどない。黒岡山古墳で箱式石棺を埋葬主体とし、倣製だ龍鏡などを副葬している。

後期の古墳は、平地に立地するものと丘陵斜面に群をなすものがある。前者には太子町常全遺跡と太子町船塚古墳群があり、常全遺跡では墳丘が削平された横穴石室を調査している。船塚古墳群では埴輪を伴う円墳と方墳を調査しており、同時期の竪穴住居に近接して検出している。後者の多くは丘陵斜面に存在している。丁古墳群（5基）・太市中古墳群（20基）・西脇古墳群（134基）・太子町黒岡古墳群（13基）・太子町上太田古墳群（3基）・太子町山田古墳群（15基）・太子町内山戸古墳群（4基）・太子町白毛古墳群（13基）・太子町立岡山古墳群（8基）・太子町丹生山古墳群（9基）・太子町東保山古墳群（5基）など横穴式石室を持つものである。黒岡古墳群中に含まれる黒岡神社古墳は、大型の横穴式石室に家形石棺が残存している。太市中古墳群のなかには九州系の要素がある石室が認められる。丁山頂古墳のように単独で立地し、T字形の平面形態と穹窿状の石室を持つ。丹生山1号墳は箱式石棺を埋葬施設とし、形象埴輪・円筒埴輪を持つ例である。終末期になると内山戸古墳群のような小石室を持つものや上太田古墳群のように切石造石室を持つものが出現する。

古墳時代初頭の集落遺跡は和久遺跡・太子町川島遺跡・太子町鶴遺跡・太子町鶴石田遺跡・太子町城山遺跡・太子町南柳遺跡・太子町平方遺跡などがあり、竪穴住居を検出している。太子町南柳遺跡では掘立柱建物を検出している。いずれも弥生時代から継続しており、この時期に集落規模が拡大する。常全遺跡では土坑を検出しており、丁・柳ヶ瀬遺跡でも土器が出土している。古墳時代中期の集落は太子町南柳遺跡・太子町川島遺跡で竪穴住居を検出している。古墳時代後期の集落は太子町亀田遺跡・太子町鶴石田遺跡・太子町船塚遺跡・太子町南柳遺跡・太子町東保高田遺跡・太子町城山遺跡で竪穴住居を検出している。

5. 古代

奈良時代において、この地域は播磨国揖保郡に所在していた。『播磨国風土記』には揖保郡は18里が記されており、丁・柳ヶ瀬遺跡周辺は大家里に比定されている。平安時代の『和名類聚抄』には揖保郡は18郷ないしは19郷が記載されており、大宅郷に比定されている。

『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条には播磨国に9駅が記載され、丁・柳ヶ瀬遺跡の北側約5kmの大津茂川上流には古代山陽道が東西方向に走っており、太市駅と推定される姫路市向山遺跡がある。西側の布勢駅家である小犬丸遺跡の調査が行われている。『延喜式』神名帳に記載のあるいわゆる式内社は揖保郡に7座あり、播磨国一宮は揖保川上流の宍粟市一宮町に伊和坐大名持御魂神社がある。

播磨国府・播磨国分寺・播磨国分尼寺はいずれも揖保郡の東隣りの飴磨郡に所在している。播磨国府が本町遺跡に推定されており、播磨国分寺・播磨国分尼寺は市川左岸に位置する。

揖保郡には古代寺院が多く、丁・柳ヶ瀬遺跡の北東1.2kmには白鳳時代に遡る下太田廃寺が存在する。塔心礎・礎石群が現存しており、法起寺式伽藍配置と考えられている。第I期は軒丸瓦には鋸齒文緑複弁八葉蓮華文・素弁十葉蓮華文、軒平瓦には忍冬唐草文が使用されている。『播磨国風土記』大田里条に呉勝を祖とする渡来人集団が摂津国島上郡から揖保郡へ移住したという記事があり、大阪府茨木市大

田麿寺でも第Ⅰ期と同系の瓦が出土している点が注目される。法隆寺の別院として創建された太子町斑鳩寺は、創建時期については明らかではないが、平安時代後期に遡る可能性が指摘されている。

丁・柳ヶ瀬遺跡の周辺の条里地割は圃場整備や宅地化などの開発で失われた地区も多いが、広い範囲に北から西に約4°振る正方位の条里地割が残る。

集落遺跡は太子町亀田遺跡で規格性の高い掘立柱建物が多数調査されているほか、檀特山遺跡・太子町川島遺跡・太子町立岡遺跡で掘立柱建物が調査されている。丁・柳ヶ瀬遺跡では刻印土器や墨書土器、太子町坊主山遺跡では墨書土器が出土している。

墓は太子町原で2基の蔵骨器が発見されている。中には火葬骨が充満していたようである。

古代における須恵器生産をはじめとする窯業は揖保郡東部から筋磨郡西部にかけて群集している。青山窯跡群・桜峠窯跡群・打越窯跡群・大池窯跡群・赤坂窯跡群・峰相口窯跡群などが存在しており、打越窯跡と赤坂1号窯跡からは鴟尾が出土している。

6. 中世以降

姫路市勝原区・大津区・網干区・太子町糸井を含む一帯は福井庄に比定されている。

中世には太子町東南遺跡・太子町鶺鴒遺跡・太子町立岡遺跡・太子町立岡笹山遺跡・太子町南佐田遺跡・たつの市福田片岡遺跡・たつの市宝林寺北遺跡で掘立柱建物を検出している。中世の寺院跡としては太子町斑鳩寺に関連する太子町円勝寺跡、太子町願成寺跡が知られ、円勝寺周辺には笹山経塚があり、出土した経筒が斑鳩寺に伝えられている。

筑紫大道（中世山陽道）はたつの市福田片岡遺跡・太子町平方遺跡で調査されている。

丁・柳ヶ瀬遺跡周辺は江戸時代初期には丁村に含まれており、姫路藩領・龍野藩領・幕府領の相給などを経て寛文12年（1672）に龍野藩領となり、幕末に至った。

明治4年（1871）の廃藩置県により、龍野県となり、その後、飾磨県と改称し、兵庫県となった。明治22年（1889）の市制町村制施行により揖保郡勝原村が成立し、明治29年（1896）には揖保郡と揖西郡が統合され、揖保郡勝原村となった。昭和21年（1946）には勝原村をはじめとして網干町・大津村・余部村・飾磨市・飾磨郡2町とともに姫路市に合併された。

姫路市は平成8年に中核都市となり、播磨地域の中心となっている。

第2章 調査の契機と経過

第1節 調査に至る経緯（図版4・5）

1. 調査の契機

兵庫県姫路土木事務所では姫路市勝原区丁において、都市計画街路網干線道路改良事業を進めている。事業は歩行者等の安全性の向上を図るよりよい生活環境の確保を目的として行われている。この事業は姫路市勝原区丁から姫路市勝原区朝日谷間の延長約600m、幅12mの片側2車線、歩道付仕様の道路拡幅事業である。事業は現道の南側を約5m拡幅するものである。平成4年度に着工し、平成8年度に完成供用開始を予定していたが、平成12年度に延長した。

事業計画の進展に伴い、平成4年度に姫路土木事務所からの調査依頼があり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が事業計画地内の埋蔵文化財分布調査を実施した。事業計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地である丁・柳ヶ瀬遺跡の南側に隣接しており、地形から埋蔵文化財包蔵地が伸びる可能性が高かった。実際の分布調査では広範囲で遺物を採集し遺跡の存在を指摘した。平成4年度と平成9年度に姫路土木事務所からの調査依頼があり、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が事業計画地内の埋蔵文化財の確認調査を実施した。事業予定地のうち東側の約70mについては丁・柳ヶ瀬遺跡の広がりが見えなくなった。

このため、平成4年度と平成9年度の確認調査をもとに姫路土木事務所からの調査依頼により、平成10年度に本発掘調査を実施した。

2. 丁・柳ヶ瀬遺跡の発見

丁・柳ヶ瀬遺跡は増田重信の「姫路市先史遺跡一覧」に記載された「勝原区丁 柳ガ瀬」「弥生土器」（増田重信『姫路市の先史遺跡』1963年）がはじりである。その後、『兵庫県遺跡地名表』に「勝原、柳ヶ瀬遺跡」（兵庫県教育委員会 1965年）と、『姫路市遺跡地名表』の「姫路市先史遺跡地名表」に「勝原区・丁・柳ヶ瀬遺跡」（姫路市立飾磨高等学校郷土研究班 1967年）と地名表が示されている。

初めて地図に地点が示されたのは、『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表 第2集』であり、「丁・ヤナガセ遺跡」（兵庫県教育委員会 1968年）と記載されている。

3. 丁・柳ヶ瀬遺跡の既往の調査

丁・柳ヶ瀬遺跡は昭和54年度に兵庫県土木部姫路土木事務所が、二級河川大津茂川・西汐入川激甚災害事業として大津茂川の護岸工事と西汐入川の改修及び大津茂川へ水路をショートカットする大規模工事を計画するにあたり兵庫県教育委員会が確認調査を行った（第1次調査）のが始まりである。確認調査の結果、A・B・C・Dの4地区について面積約3,300㎡の全面調査が必要となった。

引き続き昭和54年度に、緊急を要するA・B地区について全面発掘調査（図版4：1-A・1-B）を実施し、縄文時代中期の遺物包含層と弥生時代前期の溝などを検出した。

昭和55年度には、残りのC・D地区の全面発掘調査（図版4：2-C・2-D）と大津茂川護岸工事にかかわるE地区について、発掘調査（図版4：2-E）を実施した。C・D地区では古墳時代初頭の竪穴住居や弥生時代中期の溝などを検出した。

平成12年度には今回報告の都市計画街路網干線に伴う本発掘調査（図版4：3）を兵庫県教育委員会が行った。

平成15年度には昭和54年度調査区の西北西約200mの地点で、姫路市教育委員会が下水道に伴う調査（図版4：4）を行った。幅60cm～80cmの細い調査区であったが、弥生時代中期初頭と古墳時代初頭を含む弥生時代の竪穴住居4棟、土坑3基、古代の溝1条、ピットを検出した。

平成16年度には昭和55年度調査区の北側で、姫路市教育委員会が下水道に伴う調査（図版4：5）を行った。幅60cm～80cmの細い調査区であったが、弥生時代の東西溝2条を検出した。

平成18年度には昭和54年度調査区の南東の地点で、姫路市教育委員会が下水道に伴う調査（図版4：6）を行った。幅60cm～80cmの細い調査区であったが、弥生時代後期の竪穴住居1棟、土坑2基、溝2条を検出した。

このほかに姫路市教育委員会が昭和57年度と平成2年度と平成6年度にトレンチもしくは坪調査を行っている。

第2節 発掘調査の経過

1. 確認調査

都市計画街路網干線のうち、丁・柳ヶ瀬遺跡に隣接する西汐入川に架かる勝原橋から西側の約270m、を対象とした。事業計画およびそれに伴う用地買収の都合により、平成4年度と平成9年度と平成12年度の3回に分けて確認調査を実施した。

確認調査は遺構・遺物の有無の確認を目的とした。遺構・遺物が存在する場合は遺構面までの深さや土層の堆積状況・遺構の種類や時代を確認した。

調査は姫路土木事務所が選定した業者により実施した。調査は盛土および旧耕作土などを機械により掘削し、遺構検出・包含層掘削・壁面精査などは人力で行った。調査終了後は埋め戻しを行った。

平成4年度（遺跡調査番号920369）

平成4年度は買収が済んでいる6箇所（3トレンチ・5トレンチ・6トレンチ・9トレンチ・11トレンチ・12トレンチ）の確認調査を実施した。3トレンチ・5トレンチは勝原小学校南側に位置し、6トレンチ・9トレンチは勝原小学校西側から茶屋北川の間に位置し、11トレンチ・12トレンチは茶屋北川の西側に位置している。調査は、平成5年2月8日に行い、調査面積は36㎡である。

平成9年度（遺跡調査番号970345）

平成9年度は買収が進んだ5箇所（グリッド1・グリッド2・グリッド3・グリッド4・グリッド5）の確認調査を実施した。グリッド1は勝原小学校南側に位置し、グリッド2・グリッド3は勝原小学校西側から茶屋北川の間に位置し、グリッド4・グリッド5は茶屋北川の西側に位置している。調査期間は、平成9年10月27日・28日の2日間で、調査面積は30㎡である。

平成12年度（遺跡調査番号2000126）

平成12年度の確認調査は、平成10年度に本発掘調査を実施した東側に隣接し勝原橋までの間の延長25mの区間について、2箇所（東トレンチ・西トレンチ）実施した。調査は平成12年7月18日に実施し、調査面積は16㎡である。

2. 本発掘調査

本発掘調査は平成4年度・平成9年度・平成12年度の合計13箇所の確認調査の結果を踏まえ、平成10年度に実施した。

平成10年度（遺跡調査番号980103）

本発掘調査の調査地は姫路市立勝原小学校の南側に位置する。範囲は平成4年度確認調査の3トレンチ、平成9年度確認調査のグリッド1と平成4年度確認調査の5トレンチの東側までの延長70mであり、面積は133m²である。

調査は姫路土木事務所が選定した業者により実施した。調査は盛土および旧耕作土などを機械により掘削し、遺構検出・包含層掘削・壁面精査などは人力で行った。遺構面は2面存在していたため、上層面の掘削終了後、写真と図面の記録を取った後、下層面の調査と記録を行った。

調査期間は、平成10年8月3日～平成10年8月11日の実質5日間である。

3. 発掘調査の組織

平成4年度

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 内田隆義

主任調査専門員 大村敬通

総務課 課長 田中豊英

企画調整班 調査専門員 池田正男

調査担当 企画調整班 主任 種定淳介

平成9年度

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 上田 勲

副所長 大村敬通

総務課 課長 岩澤重則

企画調整班 主任調査専門員 輔老拓治

調査担当 企画調整班 主査 種定淳介

平成10年度

調査主体 兵庫県教育委員会

調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長 寺内幸治

副所長 大村敬通

企画調整班 調査専門員 山本三郎

主査 高瀬一嘉

総務課 課長 岩澤重則

調査第3班 調査専門員 西口和彦

調査担当 調査第3班 主査 篠宮 正
事務職員 矢野治巳

平成12年度

調査主体 兵庫県教育委員会
調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所長 寺内幸治
副所長 大村敬通
総務課 課長 森 俊雄
企画調整班 調査専門員 山本三郎
調査担当 主査 甲斐昭光

第3節 出土品整理

出土品整理は、平成20年度単年度に兵庫県立考古博物館で実施した。

出土遺物の水洗・注記は兵庫県立考古博物館魚住分館で実施し、接合以降は兵庫県立考古博物館で実施した。出土遺物の接合・補強を行った後、実測や拓本・写真撮影するものを選択した。その後、土器の実測・拓本と石器の実測を行った。土器の復原を行い、石器と合せて遺物の写真撮影を行い、写真を整理した。遺構図はトレースが行えるように補正し、実測した遺物図と遺構図と共に、レイアウト・トレースを行った。出土品の分析は、土器の胎土分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。原稿執筆・編集を行った後、報告書を刊行した。

出土品整理の組織

平成20年度

調査主体 兵庫県教育委員会
整理事務 兵庫県立考古博物館
館長 石野博信
副館長兼総務部長 藤原 悟
総務課 課長 若狭健利
課長補佐 山下裕恵
埋蔵文化財調査部 部長 若生晃彦
主幹 岡崎正雄
整理保存班 調査専門員 森内秀造
主査 菱田淳子
整理担当 整理保存班 主査 篠宮 正
非常勤嘱託員 佐伯純子、宮田麻子、西村美緒、眞子ふさ恵、嶺岡美見
日々雇用職員 小谷桂加

第3章 発掘調査の成果

第1節 確認調査の成果

平成4年度と平成9年度と平成12年度の3回に分けて13箇所の確認調査を実施した。

調査の結果、平成4年度に実施した6箇所の各トレンチは、それぞれ様相が大きく異なっていることが判明した。ベース面も一律ではなく、遺物包含層や遺構の存在も明瞭ではなかった。

勝原小学校南側のグリッド1は安定したベース面を確認し、溝状遺構を検出した。遺物は弥生時代から古墳時代後期の土器を検出した。この様相は昭和55年度に調査を行った丁・柳ヶ瀬遺跡と近似している。グリッド2・グリッド3は良好なベース面が存在しているが、遺構や遺物は確認できなかった。調査範囲の西端に位置するグリッド4・グリッド5は天津茂川の埋没旧河道の様相を示していた。

平成12年度に確認調査を行った東端の東トレンチと西トレンチは、東トレンチで遺物が僅かに出土したが遺構は存在していなかった。

以上の確認調査の結果から、3トレンチ・グリッド1・5トレンチの範囲について本発掘調査が必要であると判断した。ただし、5トレンチは道路の南側に面した民家の出入り口部分に当たるため、実際は調査可能な範囲までを本発掘調査の対象とした。

第2節 本発掘調査の成果

1. 概要

本発掘調査は確認調査の成果に基づき、平成10年度に実施した。調査区は中央より東側を東地区と呼称し、西側を西地区と呼称した。調査は盛土および旧耕作土などを機械により掘削し、包含層掘削・遺構検出・遺構掘削などは人力で行った。

調査地の基本層所は、約1mの盛土があり、約15cmの旧耕作土、約20cmの床土が存在している。東地区はこの床土を除いた標高約4.1mが遺構検出面であり、東半分の基盤層は礫を中心としており、かなり削平されている状況である。下層面は存在していない。

西地区は床土の下に約20cm暗黄褐シルト質極細砂層があり、この層を除いた標高約3.9mが上層の遺構検出面である。さらにこの基盤層となっている約20cmの灰褐シルト質極細砂層を除いた標高約3.7mが下層の遺構検出面である。

2. 遺構

1. 上層の遺構（図版6・7 写真図版2）

上層では土坑3基・溝11条・ピット群を検出した。東地区の東半分の約8mの間は基盤層が礫層になっており、遺構は検出できなかった。

SK01（図版9 写真図版4）

検出状況 調査区東地区において検出した土坑である。溝SD02の南側、土坑SK02の西側に位置し、南側は傾斜のため削平を受け消滅している。

形状・規模 直径約90cm、深さ検出面から20cmを測る円形の土坑である。

埋 土 埋土は灰褐色の粗砂から細砂が堆積しており、土器の周りは褐色のシルト質極細砂であった。

出土遺物 唯一、土坑中央部に設置された状態で出土した完形の平安時代の須恵器壺がある。

SK02 (図版9)

検出状況 調査区東地区において検出した土坑である。土坑 SK01の東側に位置している。

形状・規模 長軸は東西方向に長く、N62°Wを向く。長軸約1.1m、短辺約0.9m、深さ10cmを測る隅丸長方形の土坑で、底は平坦である。

埋 土 埋土は暗灰色のシルト質極細砂が堆積していた。

出土遺物 遺物量は少なく、図示できる遺物はない。

SD01 (写真図版5)

検出状況 調査区東地区において検出した溝である。土坑 SK01・SK02の北側の壁際に位置し、西側は溝 SD03に切られている。

形状・規模 調査区外に伸びているため、形状は不明である。幅1.5m以上、深さ最大18cmを測る。

埋 土 埋土は灰色シルト質極細砂が堆積している。

出土遺物 遺物量は少なく、古墳時代後期の須恵器坏と弥生土器壺が出土した。

SD02 (図版11)

検出状況 調査区東地区において検出した溝である。土坑 SK01と溝 SD01の間に位置している。

形状・規模 南北方向に伸びN0°を向く。長さ2.3m、幅45cm、深さ7cmを測る。断面形は浅いU字形を呈する。

埋 土 埋土は灰白色極細砂が堆積している。

出土遺物 遺物量は少なく、図示できる遺物はない。

SD03 (図版11 写真図版7)

検出状況 調査区東地区において検出した溝である。東側には溝 SD01があり、切っている。西側には溝 SD04が平行して位置している。北側は調査区外に伸びている。

形状・規模 南北方向に伸び、N17°Eを向く。幅71cm、深さ18cmを測る。断面形は浅いU字形を呈する。

埋 土 埋土は灰色シルト質極細砂が堆積している。

出土遺物 遺物量は少なく、図示できる遺物はない。

SD04 (図版11 写真図版7)

検出状況 調査区東地区において検出した溝である。溝 SD03の西側に平行して位置している。北側は調査区外に伸びている。

形状・規模 南北方向に伸び、N16°Eを向く。幅68cm、深さ12cmを測る。断面形は浅いU字形を呈する。

埋 土 埋土は灰白色シルト質極細砂が堆積している。

出土遺物 遺物量は少なく、須恵器坏Bを図示した。

SD05 (図版10 写真図版6)

検出状況 調査区西地区において検出した溝である。溝 SD04の西側に位置し、北側は攪乱に切られ

ており、南側は調査区外に延びている。

形状・規模 東西方向に延び、N55°を向く。幅1.2m、深さ25cmを測る。断面形は浅いU字形を呈する。
埋土 埋土は3層あり、上層は灰褐色シルト、中層は白色極細砂、下層は褐色極細砂が堆積している。

出土遺物 遺物量は少なく、須恵器甕と弥生土器壺底部を図化した。

SD06 (図版10 写真図版6)

検出状況 調査区西地区において検出した溝である。溝SD05の西側に位置し、北側と南側は調査区外に延びている。下層には溝SD12が存在している。

形状・規模 南北方向に延び、N40°Eを向く。幅2.2m、深さ40cmを測る。断面形は浅いU字形を呈し、西側がやや深くなっている。

埋土 埋土は3層あり、上層は暗灰褐色シルト質極細砂、中層は灰色極細砂、下層は褐色極細砂が堆積している。

出土遺物 遺物量は少なく、古墳時代後期の須恵器坏と弥生土器甕が出土した。

SD07 (図版10 写真図版7)

検出状況 調査区西地区において検出した溝である。溝SD06・SD08・SD09の西側に位置し、溝SD09を切っており、北側と南側は調査区外に延びている。

形状・規模 南北方向に延び、N31°Eを向く。幅2.1m、深さ37cmを測る。断面形は浅いU字形を呈する。

埋土 埋土は3層あり、上層は暗灰褐色シルト質極細砂、中層は灰色極細砂、下層は褐色極細砂が堆積している。

出土遺物 遺物量は少なく、弥生土器壺が出土した。

SD08 (図版11)

検出状況 調査区西地区において検出した溝である。溝SD06の西側に位置し、切られており、溝SD09の東側に位置し、切っている。下層には溝SD12が存在している。

形状・規模 東西方向に延び、N62°Eを向く。幅50cm、深さ12cmを測る。断面形は浅いU字形を呈する。

埋土 埋土は灰白色シルト質極細砂が堆積している。

出土遺物 遺物量は少なく、弥生土器高坏が出土した。

SD09 (図版10 写真図版6)

検出状況 調査区西地区において検出した溝である。溝SD08の西側、溝SD07の東側に位置し、切られている。下層には溝SD12が存在している。

形状・規模 幅90cm以上、深さ16cmを測る。断面形は浅いU字形を呈する。

埋土 埋土は2層あり、上層は褐色シルト質極細砂、下層は灰色極細砂が堆積している。

出土遺物 遺物量は少なく、弥生土器壺・甕が出土した。

SD10 (図版11 写真図版7)

検出状況 調査区西地区において検出した溝である。溝SD07の西側、ピット群の東側に位置し、ピット群に切られており、北側と南側は調査区外に延びている。

形状・規模 南北方向に延び、N21°Eを向く。幅80cm、深さ12cmを測る。断面形は浅いU字形を呈す

る。

埋 土 埋土は2層あり、上層は灰色極細砂、下層は褐色極細砂が堆積している。

出土遺物 遺物量は少なく、弥生土器甕が出土した。

SD11 (図版10)

検出状況 調査区西地区の西端において検出した溝である。溝 SD10とピット群の西側に位置し、ピット群に切られており、北側と南側は調査区外に延びている。

形状・規模 南北方向に延び、N20° Eを向く。幅1.5m、深さ30cmを測る。断面形は浅いU字形を呈する。

埋 土 埋土は2層あり、上層は暗灰褐色シルト質極細砂、下層は灰色極細砂が堆積している。

出土遺物 遺物量は少なく、図示できる遺物はない。

P01・P04およびピット群

検出状況 ピット群は調査区西地区の西端の溝 SD10と溝 SD11の間において17基検出した。一部のピットが溝 SD10と溝 SD11を切っていることから、ピット群が新しい。

形状・規模 P01が直径23cm、P04が東西45cm、南北30cmの楕円形を呈する。深さ20cmを測る。

埋 土 埋土は灰白色シルト質極細砂が堆積している。

出土遺物 遺物量は少なく、P01から弥生土器壺、P04から弥生土器甕が出土した。

2. 下層の遺構 (図版8 写真図版8)

下層の遺構は西地区でのみ検出した。検出した遺構は溝2条とピット21基である。

SD12 (図版8 写真図版9)

検出状況 調査区西地区において検出した溝である。上層の溝 SD06・SD08・SD09の下層に位置し、北側と南側は調査区外に延びている。

形状・規模 東西方向に延びN77° Eを向く。幅2.8m、深さ60cmを測る。断面形は浅いU字形を呈している。

埋 土 埋土は3層あり、上層は暗灰色、中層は暗白色、下層は黒色のシルトが堆積している。

出土遺物 弥生土器壺・甕が出土した。

SD13 (図版8)

検出状況 調査区西地区において検出した溝である。溝 SD12の西側に位置し、南側はピットに切られている。

形状・規模 南北方向に延び、N10° Eを向く。幅23cm、深さ12cmを測る。断面形は浅いU字形を呈している。

埋 土 埋土は黒色シルトが堆積している。

出土遺物 遺物は出土していない。

ピット群

検出状況 ピット群は調査区西地区の溝 SD12の東側の一群と西側の一群を検出した。東側の一群は狭い範囲に集中して7基検出した。西側の一群は疎らな状況で14基検出した。

形状・規模 直径18cm～直径38cmの円形を呈する。

埋 土 埋土は黒色シルトが堆積している。

出土遺物 遺物は弥生土器の小片が僅かに出土したが、図示できるものはない。

2. 遺物 (図版12~14 写真図版10~14)

出土した遺物のうち、主要なものを図化した。

1. 上層の遺物

SK01

須恵器壺1は口縁部を僅かに欠く。平底で、肩が丸く、短く外反する口頸部を持つ。下半は約2cmの厚みがあり、重量感がある。焼成は軟質で、磨滅が著しい。

SD04

須恵器坏2は回転ヘラ切りした底部の周縁に低い高台を貼り付けて、底部全体をナデている。

SD01

須恵器坏3は口縁部の小片で、短く外反している。須恵器坏4はやや歪んでおり、短く内傾する立ち上がりを持つ。

弥生土器壺5は口縁部の破片で、口縁部は大きく外反し、端部に面を作る。口縁端面は櫛状工具で綾杉文をキザミ、円形浮文を貼り付ける。

SD06

須恵器坏6は立ち上がりを欠く。底部のみに自然釉がかかっている。

弥生土器甕7は底部の破片で、平底である。底部から体部にかけては鋭角で、内傾気味に立ち上がる。外面には接地黒斑が存在する。

削器S1は折れているため元の形状は明らかでない。サヌカイト製で両面ともに使用による摩耗が著しい。穂摘具と考えられる。

SD05

須恵器甕8は体部から頸部にかけての破片である。体部は球形気味で、肩部に稜を作る。底部は右回転のケズリを行っている。肩部から頸部にかけては絞って作っており、細く直立した頸部である。

弥生土器甕9は底部の破片で、平底である。

SD07

弥生土器壺10は底部の破片で、平底である。底面端から体部にかけて接地黒斑が存在し、対応するやずれた内面に燻溜まり黒斑が存在する。

削器S2は折れているため元の形状は明らかでない。サヌカイト製である。

SD08

弥生土器高坏11は脚部の破片で、直線的にハ字状に開き、脚端部に面を作る。

SD09

弥生土器壺12は無頸壺の体部上半の破片で、肩の張った体部上半に直立して肥厚する口縁部が付く。口縁上面には幅の広い面を作り、端部はキザミを加える。体部上半には幅の疎らなヘラ描沈線を10条以上巡らす。弥生土器甕13は体部上半から口縁部にかけての破片で、口縁部はく字状に外反している。全体に器壁は薄く、口縁端部は丸く作る。弥生土器甕14は底部の破片で、平底である。体部は直立気味に立ち上がる。

SD10

弥生土器甕15は底部の破片で、平底である。底部から体部にかけては鋭角で、外反気味に立ち上がる。

P01

弥生土器壺16は広口壺の口縁部の破片で、大きく外反し口縁端部に面を作る。口縁端部から外面にかけては黒斑が残る。

P04

弥生土器甕17は底部の破片で、平底である。体部は直線的に外傾して立ち上がる。

遺構に伴わない遺物

須恵器椀18は口縁部の破片で、大きく外傾する。口縁部は丸く作り、口縁端部に重ね焼時の自然釉が付着する。

弥生土器壺19は広口壺の口頸部の破片で、外傾する頸部から大きく外反する口縁部が付く。口縁端部は面を作り、無文である。弥生土器壺20は直口壺の口縁部の破片で、直立した口縁部に指による低い押圧突帯を3条貼り付けている。口縁端部は肥厚して面を作る。

弥生土器甕蓋21は口縁部の破片で、笠形である。口縁端部は弱い横ナデを行っている。弥生土器甕22は底部の破片で、平底である。体部は直線的に外傾し、外面は縦方向のミガキを施す。底面端から体部にかけて接地黒斑が存在する。弥生土器甕23～25は底部の破片で、平底である。体部は直線的に外傾して立ち上がる。23は底面端から体部にかけて接地黒斑が存在し、24は底面に接地黒斑が存在する。

削器 S3は刃部を長辺とした台形を呈する。サヌカイト製である。

2. 下層の遺物

SD12

SD12からは弥生土器壺・甕が出土している。

壺26は底部と体部から頸部にかけての破片で、胎土や調整・色調から同一固体と判断した。体部上半がやや張っている。底部から上方に向かってハケ調整を行い、後に間隔をあけた幅の細いミガキ調整を縦・斜め・横方向に行っている。底部は未調整である。口縁部を欠くため段の有無は不明であるが、口頸境は1条以上のヘラ描沈線で区切っている。頸体境は段を作らず、1条のヘラ描沈線で区切っている。頸部と体部の比率は1：2である。底面端から体部最大径にかけて接地黒斑が存在する。

壺27は頸部下半の破片で、頸体境は段を作らず、間隔の狭い7条のヘラ描沈線で区切っている。

壺28は口縁部の破片で、一部しか残っていないが、単位の小さい波状口縁である。口縁内には注ぎ口部を表現したキザミ目突帯を貼り付けている。

壺29は口縁部の破片で、短く外反する口縁直下に2条以上のヘラ描沈線を巡らしている。

壺30は口頸部の破片で、口縁端部が肥厚し、短く外反する。口縁端部にはキザミ目を付けている。口縁直下に2条以上の太いヘラ描沈線を巡らしている。

壺31は底部の破片で、底面周縁が盛り上がるようにナデで作っており、底面周縁のみ接地させ高台状に作っている。底面端から体部にかけて接地黒斑が存在する。

壺32～34は底部の破片で、平底である。34は底面中央から体部にかけて接地黒斑が存在し、対応する内面に熾溜まり黒斑が存在する。

甕35は体部上半の破片で、体部はほぼ直立している。口縁部は逆L口縁で外方向は短く扁平に突出しており、内側にも僅かにはみ出している。体部は僅かに縦方向のハケ調整が残るが、無文である。

甕36は口縁部の破片で、逆L口縁甕である。口縁部は下向きに貼り付けており、端部にヘラ状工具で細く切るようなキザミ目を付けている。口縁直下の体部最上部には3条以上のヘラ描沈線を巡らしている。外面には黒斑が存在する。

甕37は体部上半の破片で口縁部を欠く。逆L口縁甕の可能性が高い。内傾した体部上半には細いヘラ描沈線を8条と最下端に1条のヘラ先の列点文を巡らしている。

甕38は底部の破片で、底面を強くナデて、高台状に作っている。体部外面に工具のアタリが存在する。内面はナデ仕上げを行っている。

甕39は底部の破片で、直線的に外方に開く。外面は底部から上方に向かって細かい単位のハケ調整を行っている。底部は未調整である。内面はナデ調整を行っている。底面端から体部にかけて接地黒斑が存在する。

底部40は、底面が窪み高台状に突出している。底面に接地黒斑が存在する。

第4章 自然科学的調査の成果

第1節 丁・柳ヶ瀬遺跡出土土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

矢作健二・石岡智武

はじめに

今回の分析調査では、丁・柳ヶ瀬遺跡から出土した、弥生時代前期および中期の土器、さらに平安時代の須恵器について、その材質（胎土）の特性を明らかにすることにより、各土器間での胎土の類似性あるいは特異性を見出す。また、これまでに分析した周辺遺跡の事例との比較なども行い、丁・柳ヶ瀬遺跡の各時期における土器の製作事情に関わる資料を作成する。

1. 試料

試料は、丁・柳ヶ瀬遺跡から出土した土器片22点である。内訳は、弥生土器片21点、平安時代の須恵器片1点である。各試料の資料No.、器種、時期、出土遺構などは一覧表にして第1表に示す。

弥生土器の試料は、資料No.01～21とされ、これらのうち資料No.01～13は弥生時代前期、資料No.14～21は弥生時代中期とされている。また、器種は、弥生時代前期の土器では、壺が8点、甕が5点、弥生時代中期の土器では、壺が2点、甕が5点、蓋が1点である。平安時代の須恵器は壺である。

第1表 分析試料一覧および胎土分類

資料No.	報告No.	種別	器種	時期	遺構	調査番号	備考	胎土分類														
								鉱物・岩石組成							粒径組成							
								A2	A4	C4	C5	C6	F2	H	vc	c	m	f	vf	cs		
01	26	弥生土器	壺	弥生時代前期	S D12	980103																
02	27	弥生土器	壺	弥生時代前期	S D12	980103																
03	30	弥生土器	壺	弥生時代前期	S D12	980103																
04	31	弥生土器	壺	弥生時代前期	S D12	980103																
05	32	弥生土器	壺	弥生時代前期	S D12	980103																
06	33	弥生土器	壺	弥生時代前期	S D12	980103																
07	34	弥生土器	壺	弥生時代前期	S D12	980103																
08	35	弥生土器	甕	弥生時代前期	S D12	980103																
09	37	弥生土器	甕	弥生時代前期	S D12	980103																
10	38	弥生土器	甕	弥生時代前期	S D12	980103																
11	39	弥生土器	甕	弥生時代前期	S D12	980103																
12	40	弥生土器	甕	弥生時代前期	S D12	980103																
13	12	弥生土器	壺	弥生時代前期	S D09	980103																
14	13	弥生土器	甕	弥生時代中期	S D09	980103																
15	10	弥生土器	壺	弥生時代中期	S D07	980103																
16	7	弥生土器	甕	弥生時代中期	S D06	980103																
17	15	弥生土器	甕	弥生時代中期	S D10	980103																
18	19	弥生土器	壺	弥生時代中期	包含層	980103																
19	21	弥生土器	蓋	弥生時代中期	包含層	980103																
20	22	弥生土器	甕	弥生時代中期	包含層	980103																
21	23	弥生土器	甕	弥生時代中期	包含層	980103																
22	1	須恵器	壺	平安時代	S K01	980103																

A 2 : 岩石片の種類構成が主にチャートなどの堆積岩類と凝灰岩や流紋岩などの火砕岩類および花崗岩類からなり、さらに火山ガラスを多く含む。
A 4 : 岩石片の種類構成が主に堆積岩類と凝灰岩や流紋岩などの火砕岩類および花崗岩類などの深成岩類、さらに緑色岩、珪化岩、変質岩類および火山ガラスを含む。
C 4 : 岩石片は花崗岩類を主体とし、少量のチャートを伴い、試料によっては微量の角閃石、緑廉石、凝灰岩、流紋岩・デイサイトおよび火山ガラスなどを含む。
C 5 : 岩石片は花崗岩類を主体とし、少量の凝灰岩と微量の緑廉石を伴い、試料によっては微量の角閃石、堆積岩類、変質岩、珪化岩などを含む。
C 6 : 岩石片は花崗岩類を主体とし、それ以外の岩石片をほとんど含まない。
F 2 : A 4 類の岩石片の種類構成から花崗岩類が抜けた組成であり、その中で凝灰岩がやや多い組成を示す。
H : 石英の鉱物片とチャートの岩石片を主体とする。他には微量の斜長石と多結晶石英および火山ガラスが含まれる。
砂全体の粒径組成においてピークを構成する粒径: c;粗粒砂 m;中粒砂 f;細粒砂 vf;極細粒砂 cs;粗粒シルト ●;第二のピーク

2. 分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計測した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の3次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

3. 結果

観察結果を第2表、第1～3図に示す。鉱物片および岩石片の組成をみると、試料間で類似する組成があり、それが複数あることも看取された。具体的には、22点の試料から、大きくは4分類、細分すると7分類の鉱物・岩石組成が認められた。これまでに兵庫県下各地における縄文土器、弥生土器および土師器の胎土分析で認められている鉱物・岩石組成分類と比較し、ここでは、それらを踏襲した分類を示す。

A 2類・A 4類：A類の特徴は、岩石片の種類構成が主にチャートや頁岩、砂岩などの堆積岩類と凝灰岩・流紋岩などの火砕岩類および花崗岩類などの深成岩類の3者からなることであった。今回の分析では、この3者に加えて、火山ガラスを多く含む組成であるA 2類と緑色岩、珪化岩、変質岩類および火山ガラスも比較的多く含むA 4類が認められた。なお、A 2類は、伊丹市小阪田遺跡の弥生土器や加古川市溝之口遺跡の土師器に認められており、A 4類は、丁・柳ヶ瀬遺跡から至近の太子町東南遺跡の縄文土器や土師器に多く認められている。今回の試料では、A 2類は弥生時代前期の資料No. 03、04の2点のみ、A 4類は弥生時代中期の資料16、17の2点にのみ認められる。

C 4類・C 5類・C 6類：花崗岩類を主体とする岩石片組成はC類としている。今回の試料では、22点中16点の試料がC類に分類された。これまでの兵庫県内の胎土分析においてC類については、C 1～C 3類に細分しているが、その分類基準となる角閃石や黒雲母の鉱物片が、今回の試料では含まれないか極めて微量であるため、新にC 4類以下を設定した。C 4類は、少量のチャートを伴い、試料によっては微量の角閃石、緑簾石、凝灰岩、流紋岩・デイサイトおよび火山ガラスなどを含む。C 5類は、少量の凝灰岩と微量の緑簾石を伴い、試料によっては微量の角閃石、堆積岩類、変質岩、珪化岩などを含む。C 6類は、花崗岩類以外の岩石片をほとんど含まない。今回の試料では、C 5類が最も多く、9点の試料がこれに分類され、次いでC 4類が5点、C 6類は2点であった。各分類の資料No. は第1表を参照されたい。

第2表 薄片観察結果(1)

表	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計									
		鉱物片							岩石片							その他												
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑廉石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	珪長岩	ホルンフェルス		粘板岩	緑色岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	植物珪酸体	
01	細礫																											0
	極粗粒砂																											0
	粗粒砂										1					1									1			3
	中粒砂	2	2	1																								5
	細粒砂	4		1																								5
	極細粒砂	6		3																								9
	粗粒シルト	1		2																				1				4
	中粒シルト																											0
基質																											137	
孔隙																											6	
02	細礫																											0
	極粗粒砂	1								3					1	1												6
	粗粒砂	5	3	1						1			1	13														24
	中粒砂	11	3	1						1				21										1				38
	細粒砂	26	8	7										5														46
	極細粒砂	36	9	11	1	4																						61
	粗粒シルト	11	5	5																								21
	中粒シルト	3		1																								4
基質																											640	
孔隙																											38	
03	細礫									1																		1
	極粗粒砂	1									1		1	1		1	1											6
	粗粒砂	1								1				3										1				6
	中粒砂	2	2		1									5										3				13
	細粒砂	10	1	4	2								1											6				24
	極細粒砂	8	1	1		1																		2				13
	粗粒シルト	3	1	6																						1		11
	中粒シルト	1																										1
基質																											404	
孔隙																											20	
04	細礫																											3
	極粗粒砂									1	1										2							2
	粗粒砂	2		1						1				5									2	1				12
	中粒砂	3	5	1						1														6				16
	細粒砂	8	1	7			1				1			2										13				33
	極細粒砂	7	2	1																				7				17
	粗粒シルト	1		5																				2		1		9
	中粒シルト	1																										1
基質																											358	
孔隙																											21	
05	細礫																											1
	極粗粒砂	1								1														1				10
	粗粒砂	4	4	1										18														27
	中粒砂	8	7	5						1				11														32
	細粒砂	18	3	2							1			3														27
	極細粒砂	28	9	9	1	1																						48
	粗粒シルト	11	3	9		1																						24
	中粒シルト	1																										1
基質																											537	
孔隙																											26	
06	細礫																											1
	極粗粒砂	2	1																									7
	粗粒砂	10	4	5																				1				52
	中粒砂	8	9	5							2			20														44
	細粒砂	19	1	8	2						1			9														40
	極細粒砂	17	2	10		3																						32
	粗粒シルト	10	3	8		1																						22
	中粒シルト	2																										2
基質																											462	
孔隙																											24	

第2表 薄片観察結果(2)

資料No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計									
		鉱物片						岩石片										その他										
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑帘石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	珪長岩	ホルンフェルス		粘板岩	緑色岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	植物珪酸体	
07	細礫																											1
	極粗粒砂								1																			1
	粗粒砂	3	2	2																								16
	中粒砂	6	4	3																								27
	細粒砂	33	4	7	1										2	5												55
	極細粒砂	37	2	11		1																						52
	粗粒シルト	28	1	9																				1				38
	中粒シルト	10																										10
基質																											804	
孔隙																											27	
08	細礫									4																		4
	極粗粒砂	1																										10
	粗粒砂	5	1	1																								21
	中粒砂	9	3	7		1																						32
	細粒砂	25	4	11												6												46
	極細粒砂	19	2	12	1	2																						36
	粗粒シルト	5	1	8																								14
	中粒シルト	2		1																								3
基質																											448	
孔隙																											22	
09	細礫									1	1	1									2							5
	極粗粒砂	1									1												2					5
	粗粒砂																							2				7
	中粒砂	5	1	1							1																	13
	細粒砂	7	1	1							1					2									1			13
	極細粒砂	7		4																								11
	粗粒シルト	11	1	2		1																						15
	中粒シルト	2																										2
基質																											317	
孔隙																											6	
10	細礫									1	1											1						3
	極粗粒砂	1								1	7	5	2					1	1			2	2	1	5			29
	粗粒砂	1									4		1									2	1		1			10
	中粒砂	2	1	2							3		2											2	5			17
	細粒砂	6		1							2													1	7			17
	極細粒砂	4		1	1								3												1			11
	粗粒シルト	6		1																					1			8
	中粒シルト	1																							1			1
基質																											516	
孔隙																											32	
11	細礫									1																		1
	極粗粒砂																						1					2
	粗粒砂	1																										3
	中粒砂	5		1									1	2														9
	細粒砂	7		3							1		1												1			13
	極細粒砂	12		3	1	2																			1			19
	粗粒シルト	14				1																						16
	中粒シルト	3																								1		3
基質																											314	
孔隙																											9	
12	細礫									1																		1
	極粗粒砂																											3
	粗粒砂	5		1																				1				28
	中粒砂	3	2	2									1	14														22
	細粒砂	7	6	4										6														23
	極細粒砂	14	6	10																								30
	粗粒シルト	8	1	7																								16
	中粒シルト	1		1																								2
基質																											416	
孔隙																											19	

第2表 薄片観察結果(3)

資料No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																			合計							
		鉱物片						岩石片											その他									
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑帘石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	珪長岩	ホルンフェルス	粘板岩	緑色岩		脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	植物珪酸体	
13	細礫																											1
	極粗粒砂																											7
	粗粒砂									2				14														16
	中粒砂	3	3	4						1				21														32
	細粒砂	19	8	15		2								14														58
	極細粒砂	35	8	11		3																						57
	粗粒シルト	10	1	10		3																						24
	中粒シルト	2		3																								5
基質																											471	
孔隙																											20	
14	細礫																											0
	極粗粒砂	1								2				1														4
	粗粒砂	3						1		3				7					1	2	2							19
	中粒砂	10								2				6											2			20
	細粒砂	8	2	1						1				2											4			18
	極細粒砂	14	1	3																					2			20
	粗粒シルト	7	3	7																								17
	中粒シルト	2																										2
基質																											321	
孔隙																											9	
15	細礫																											0
	極粗粒砂	1								1				2														4
	粗粒砂		2						1		2	1	6							2				2				16
	中粒砂	3	2	2				1			1	1	8		1					1	1			1				23
	細粒砂	8	2	2		3			1				4															21
	極細粒砂	13	3	6																								22
	粗粒シルト	4		5		1																				1	11	
	中粒シルト	1		2																								3
基質																											447	
孔隙																											14	
16	細礫																				1			1				2
	極粗粒砂												1								1							2
	粗粒砂	1								1	3	2	2							3	2		2					16
	中粒砂	3	1							1	2		2	1	1						1			1				13
	細粒砂	2								1			2											2				7
	極細粒砂	5		5		1		1																2				14
	粗粒シルト	6		2																				2		1	11	
	中粒シルト	2																										2
基質																											362	
孔隙																											16	
17	細礫																									1	1	
	極粗粒砂								1				1		3									1				6
	粗粒砂	2	1						2	1	6		2	2							1	4	1					22
	中粒砂	5	2	4				5	1	1	5			3						1	2	2	2	5				38
	細粒砂	11	1	4				3			2	1	2	1							1			4				30
	極細粒砂	9		7				3					1											5				25
	粗粒シルト	12		3																								15
	中粒シルト																											0
基質																											498	
孔隙																											24	
18	細礫													1														1
	極粗粒砂										1			2								1						4
	粗粒砂	2	1	2					2		1	1	7									1						17
	中粒砂	4	1	3					1	2				6														17
	細粒砂	13	2	6							1			4											1			28
	極細粒砂	24		7		1																						32
	粗粒シルト	13		9		1																				1	24	
	中粒シルト	1																										1
基質																											553	
孔隙																											26	

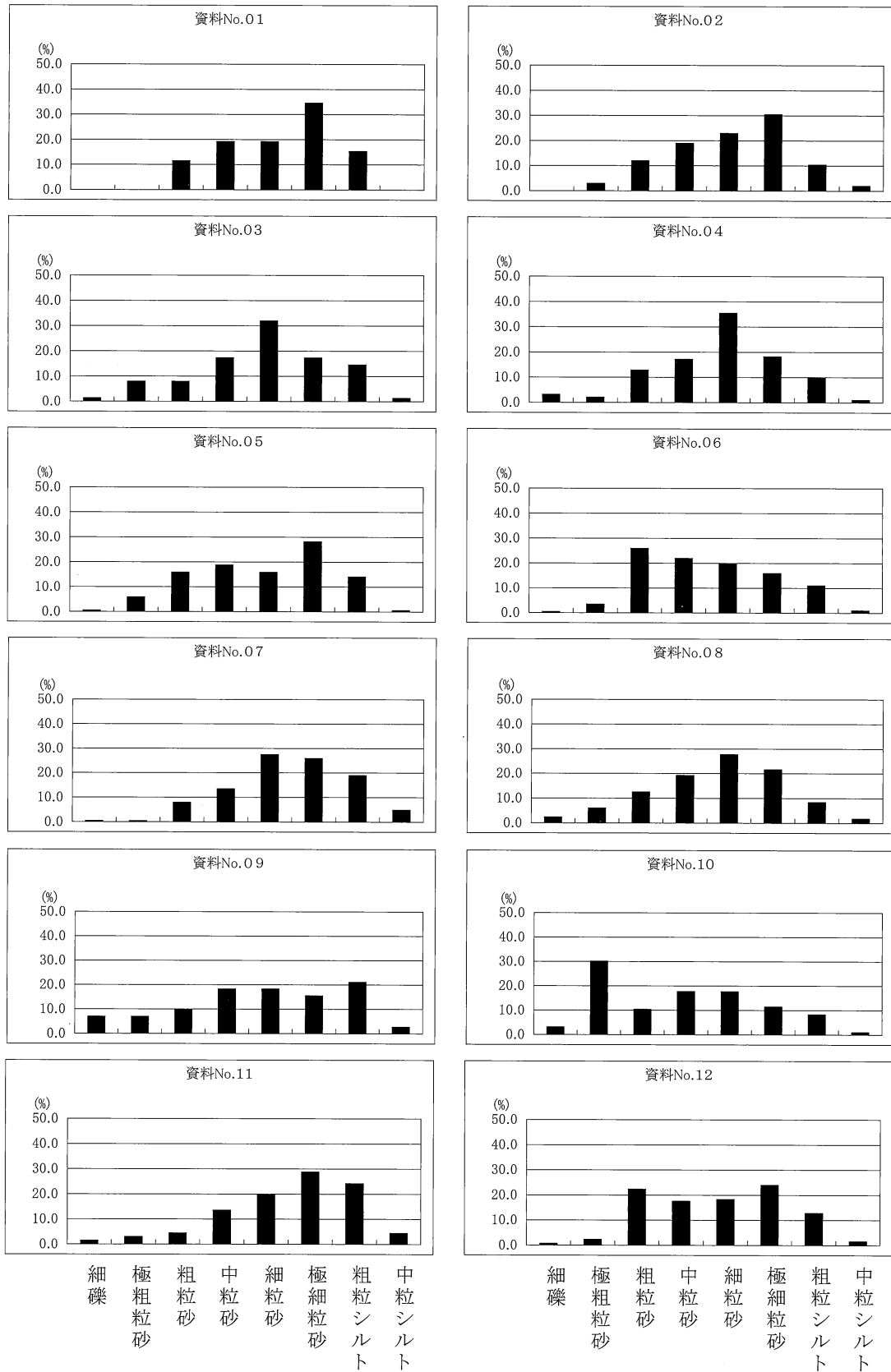
第2表 薄片観察結果(4)

資料No.	砂粒区分	砂粒の種類構成																	合計										
		鉱物片						岩石片										その他											
		石英	カリ長石	斜長石	角閃石	緑廉石	不透明鉱物	チャート	頁岩	砂岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	花崗斑岩	珪長岩	ホルンフェルス		粘板岩	緑色岩	脈石英	変質岩	珪化岩	火山ガラス	植物片	植物珪酸体		
19	細礫																											1	
	極粗粒砂	1								1																		4	
	粗粒砂	3	1	1						3					30							1	1					40	
	中粒砂	15	2	9							1				21			1							1			53	
	細粒砂	23	2	12	2						1				5													45	
	極細粒砂	24	1	13		1								2														42	
	粗粒シルト	7	1	4		1																						13	
	中粒シルト	1		1																								2	
	基質																												533
	孔隙																												20
20	細礫																											0	
	極粗粒砂	3													5													8	
	粗粒砂	2		1											9													12	
	中粒砂	3	1	2											14													20	
	細粒砂	13	2	6											6													27	
	極細粒砂	16	1	11																								29	
	粗粒シルト	3		8																				1				11	
	中粒シルト	1																										1	
	基質																												426
	孔隙																												19
21	細礫																											0	
	極粗粒砂																											0	
	粗粒砂	2													11													13	
	中粒砂	3	1	1										2	11													18	
	細粒砂	11	3	3											8													25	
	極細粒砂	16	6	10	1																							33	
	粗粒シルト	12		7																						2	21		
	中粒シルト	5		1																								6	
	基質																											461	
	孔隙																											11	
22	細礫																											0	
	極粗粒砂													1														1	
	粗粒砂										1																	1	
	中粒砂	1		1							3																	5	
	細粒砂	2									2			2														6	
	極細粒砂	4									1																	7	
	粗粒シルト	3																						2			3		
	中粒シルト	2																										2	
	基質																											101	
	孔隙																											0	

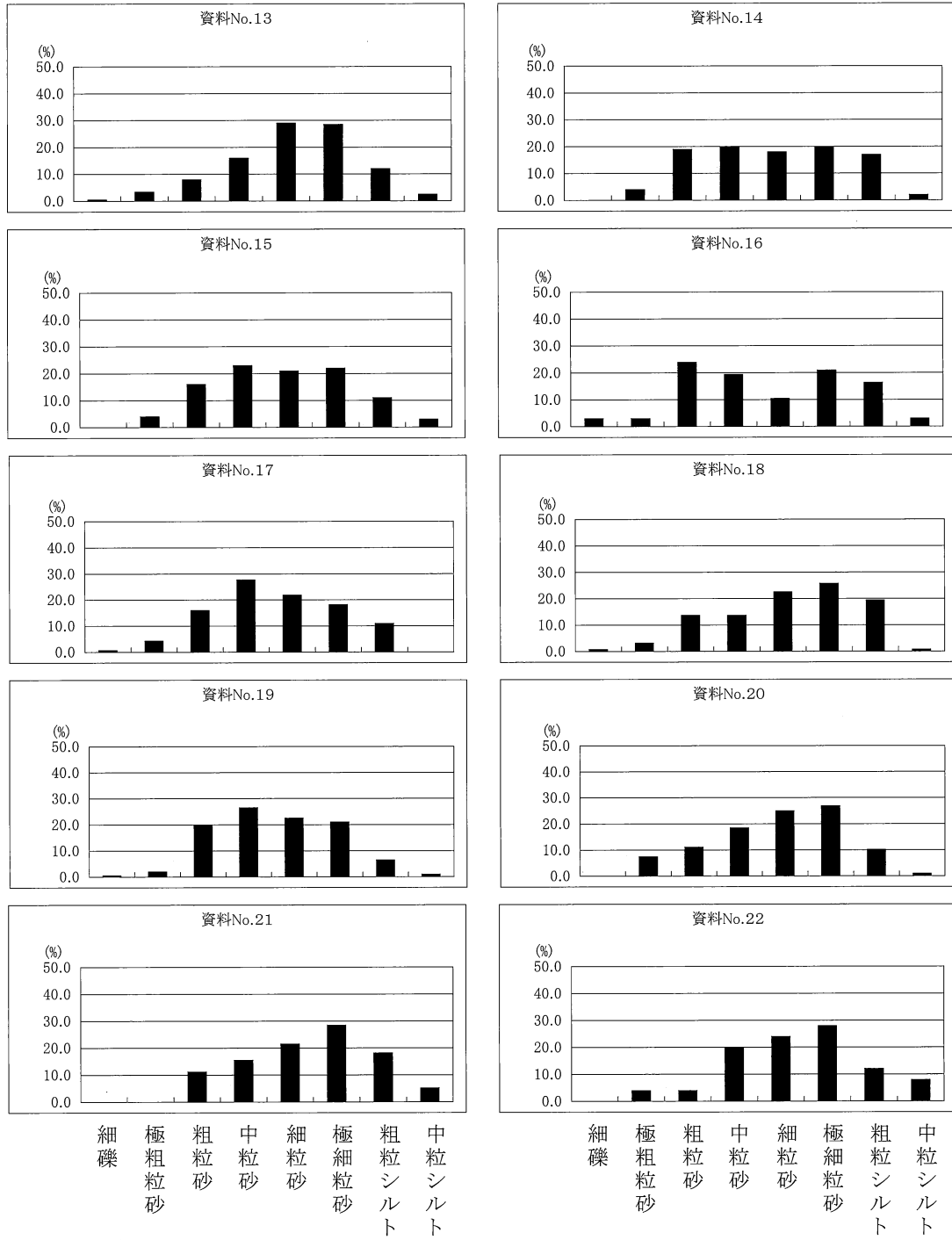
F 2類：凝灰岩を主体とする岩石片組成はF類としている。今回の試料では、上述したA 4類の組成から花崗岩が欠落し、凝灰岩が比較的多く含まれる組成をF 2類とした。F 2類に分類される試料は、試料No.10の1点のみである。

H類：鉱物片ではほとんど石英からなり、岩石片はチャートが多く、微量の多結晶石英と火山ガラスを含む。このような組成は、これまでの分析例では認められなかったことから、新にH類とした。今回の試料では、平安時代の須恵器である資料No.22の1点がこれに分類される。

なお、今回の試料では、A 2類とC類各類に分類された試料全てにおいて、花崗岩類の岩石片に微文象組織が認められたことも特徴としてあげられる。



第2図 胎土中の砂の粒径組成 (1)



第2図 胎土中の砂の粒径組成 (2)

粒径組成（第2図）をみると、極細粒砂をモードとする試料が多く、22点中12点の試料がそれに相当する。それらの中には、中粒砂または粗粒砂が極細粒砂と同程度に多い組成も含まれている。他に細粒砂をモードとする試料が5点、中粒砂をモードとする試料が2点、極粗粒砂、粗粒砂、粗粒シルトの各粒径をモードとする試料が、それぞれ1点ずつある。

各試料の碎屑物・基質・孔隙の割合（第3図）をみると、碎屑物の割合は15～30%の範囲にあるが、特にどの割合に多いという傾向は認められない。したがって、碎屑物の割合による分類は、今回の試料では設定されない。以上述べた試料の胎土分類をまとめて第1表に併記する。各時期の土器胎土の状況は以下のようになる。

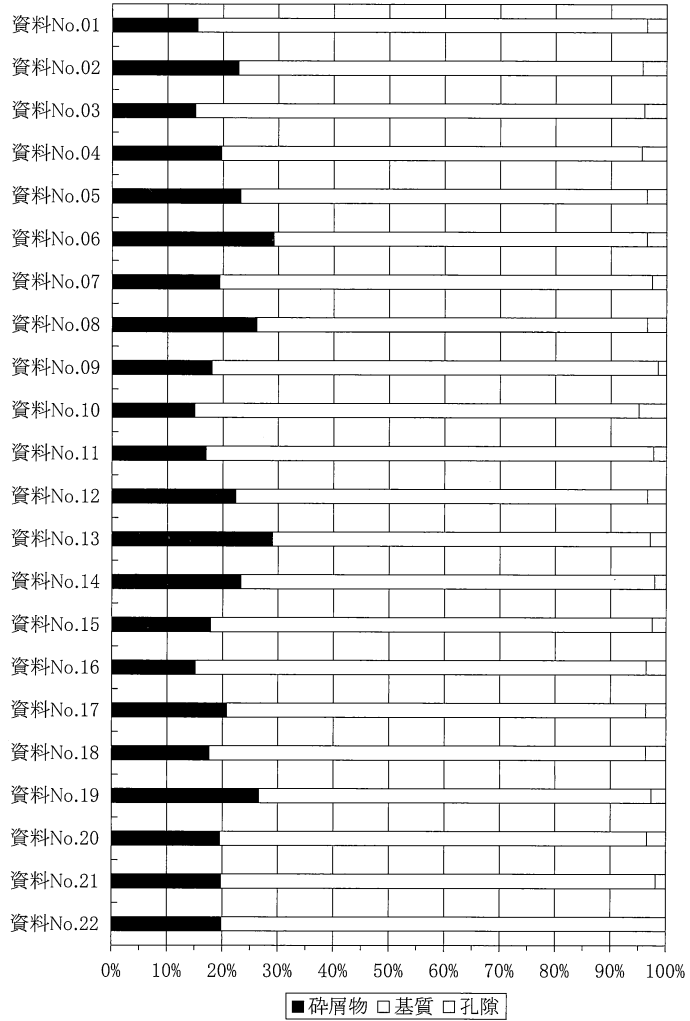
（1）弥生時代前期

鋳物・岩石組成は、C4類とC5類とともに5点ずつで主体を占める。器種をみると、C4類は全て壺であり、C5類は4点が甕、1点が壺という構成であり、器種と胎土との相関が看取される。C類以外には、A2類が2点、F2類が1点あり、前者は壺、後者は甕である。また、これらの胎土分類は、下記の弥生時代中期の試料には認められない。

粒径組成では、細粒砂にモードのある試料と極細粒砂にモードのある試料とが、ともに5点ずつで多く、他に極粗粒砂と粗粒砂および粗粒シルトの各粒径にモードのある試料が1点ずつある。上述した鋳物・岩石組成との対応では、A2類の2点がいずれも細粒砂をモードとし、F2類の資料No.10が極粗粒砂をモードとしているが、C4類およびC5類の粒径組成は複数に分かれる。

（2）弥生時代中期

鋳物・岩石組成は、C5類が4点と多く、A4類とC6類がともに2点ずつである。器種別にみると、2点の壺はともにC5類であるが、甕の組成は3種類に分かれる。蓋は1点のみであるが、C5類である。



第3図 碎屑物・基質・孔隙の割合

粒径組成では、極細粒砂をモードとする試料が多く、6点を占め、他の2点は中粒砂をモードとする。

(3) 平安時代須恵器

鉱物・岩石組成は、今回新設定されたH類であり、粒径組成は極細粒砂をモードとする。

4. 考察

(1) 胎土の由来する地域について

胎土中に含まれる鉱物片と岩石片の組成は、土器の材料となった粘土や砂が採取された場所の地質学的背景を示唆している。今回の試料では、花崗岩類の岩石片が多く含まれることが特徴のC類の胎土が主体を占めた。このことから、丁・柳ヶ瀬遺跡から出土した弥生土器の多くは、花崗岩類の分布する地質を背後に有する地域でその材料が採取され、作製された可能性が高いと考えられる。今回の試料におけるC類の特徴として、花崗岩類の岩石片が多い試料でも、角閃石や黒雲母などの有色鉱物片をほとんど伴わないことと花崗岩類の岩石片には微文象組織が認められたことがあげられる。ここで、丁・柳ヶ瀬遺跡の立地する天津茂川流域の地質を山元ほか(2000)などにより概観してみると、丁・柳ヶ瀬遺跡から北北東へ約3km離れた位置にある城山を最高点とし桜山貯水池を囲む丘陵に、桜山岩体と呼ばれる後期白亜紀に貫入した斑状花崗閃緑岩の分布を認めることができる。その顕微鏡下における岩石記載によれば、斑状角閃石黒雲母花崗閃緑岩とされ、角閃石の一部および黒雲母のほとんどは緑泥石に置換されているとあり、さらに基質部に微文象組織も確認されている。これらの特徴は、上述した今回のC類における特徴と良く一致し、桜山岩体の地理的位置も考慮すれば、C類の胎土は、桜山岩体周縁の堆積物に由来する可能性が高いと考えられる。また、桜山岩体の周囲には、白亜紀の火砕流堆積物および岩屑なだれ堆積物からなる伊勢層により構成された丘陵が分布している。この火砕流堆積物は凝灰岩からなり、堆積岩類や流紋岩などの異質岩片を含み、岩屑なだれ堆積物も堆積岩類や流紋岩および凝灰岩などからなる角礫岩とされている。したがって、桜山岩体の周辺には、C4類やC5類のような組成を示す碎屑物の分布が推定される。おそらくC4、C5、C6の各類の違いは、桜山岩体周辺における局所的な材料採取地の違いに由来すると考えられる。

今回の試料では、A2類に分類された試料の胎土中の花崗岩類岩石片にも微文象組織が認められたことから、A2類の胎土も桜山岩体の周辺地域に由来する可能性がある。A2類とC類との違いは、花崗岩類の岩石片の量比であるから、花崗岩類の岩石片の少ないA2類の由来する地域は、C類の地域に対して、花崗岩類の給源である桜山岩体から、より離れた地域であることを示唆していると考えられる。また、A2類の特徴である火山ガラスについては、比較的新鮮であり、その形態が薄板状のバブル型を呈することから、第四紀更新世に噴出した広域テフラに由来する可能性がある。このようなテフラ層は、更新世に形成された段丘構成層中に狭在することが多いが、桜山岩体の周辺地域には、更新世段丘の分布は認められていない。ただし、周辺の丘陵の小谷には更新世後期に形成された山麓緩斜面堆積物の分布が多数認められており、これらの緩斜面堆積物中あるいはその上位にテフラ層が狭在している可能性がある。いずれにしても現時点では、C類各類もA2類も、桜山岩体周辺地域の中の具体的な地域性まで示すには至っていない。今後、その地域性を追求する場合には、対象地域各地点の堆積物における鉱物・岩石組成を確認することも必要であると考えられる。

A4類については、前述したように丁・柳ヶ瀬遺跡から北西へ約2km離れた位置にある東南遺跡から出土した縄文土器や土師器に多く認められている。東南遺跡における報告では、A4類は、その鉱物・

岩石組成が揖保川流域の地質分布と一致することから、揖保川下流域の地域性が示唆されると述べた。今回の試料でA 4類とされた試料は2点あるが、A 2類とは異なり、いずれもそこに含まれる花崗岩類には微文象組織は認められていない。したがって、A 4類は、東南遺跡と同様に揖保川下流域の地域性が示唆され、相対的な位置関係として、今回のA 2類の地域よりもさらに桜山岩体から離れた地域が想定される。

F 2類の特徴は凝灰岩の多いことであるが、花崗岩類の岩石片を含まないことも特徴となる。ここで、揖保川、林田川、大津茂川、菅生川、夢前川および市川の各河川流域の地質を猪木（1981）により概観すると、揖保川には上流域と中流域に花崗岩類の分布があり、市川には上流域に花崗岩類が広く分布している。したがって、F 2類の由来する地域は、これらの河川沿いである可能性は低い。一方、上述の林田川から夢前川までの各河川については、桜山岩体より上流域には花崗岩類の分布は認められない。さらに、F 2類の特徴として、堆積岩類と緑色岩の含有が指摘されるが、これらの岩石は、菅生川および夢前川の上流域に広く分布する丹波帯に含まれている（山元ほか、2000）。以上のことから、F 2類の地域性としては、桜山岩体よりも北側の菅生川または夢前川流域という範囲が推定される。

H類は、平安時代の須恵器のみに認められ、これまでに分析した加古川市や姫路市など播磨平野に位置する遺跡出土の縄文土器や弥生土器および土師器には認められなかった胎土である。H類の特徴はチャートを多く含むことであるが、播磨平野の地質学的背景を考慮すると、凝灰岩や流紋岩、安山岩など火砕岩や溶岩に由来する岩石が全く認められないことも重要な特徴となる。すなわち、播磨平野の背後に広がる山地には、相生層群と呼ばれる中生代白亜紀の火砕岩や溶岩からなる地質が広く分布しており、播磨平野を構成する堆積物中にこれらの岩石が混在しないということは考えにくい。※なお、資料NO. 22の胎土中に含まれる長石類には高温変化が認められないことから、チャート以外の岩石片が焼成で溶失した可能性は低い。したがって、H類は、播磨平野以外の地域に由来する可能性が高い。H類の試料が平安時代の須恵器であることから、播磨平野外からの搬入の可能性は十分あると言って良い。なお、チャートの分布域は、特に限定されるものではないため、現時点ではH類の具体的な地域性は推定できない。

（2）時期および地域による胎土の違いについて

結果の項で述べたように、今回の試料では、弥生時代前期と中期との間で胎土の鉱物・岩石組成の傾向が異なり、さらに、前期と中期のそれぞれにおいて、壺と甕との間でも胎土の鉱物・岩石組成の傾向の違いが認められた。この傾向に上述した各胎土の地域性を重ねてみると以下のように説明することができる。

弥生時代前期も中期も、桜山岩体周辺の堆積物を材料とした土器が多いが、その中には3種類の材料が存在し、前期の壺にのみ使用されたC 4類、前期および中期にわたって壺にも甕にも使用されたC 5類、中期の甕にのみ使用されたC 6類という傾向が読み取れる。さらに、前期の壺の中には、桜山岩体からやや離れた位置の材料が使用された土器も少数混在し、前期の甕の中には、桜山岩体よりも北の菅生川あるいは夢前川流域からおそらく搬入された可能性のあるF 2類の土器も存在する。F 2類の試料は、胎土中の砂分の粒径組成も、他のC類の試料とは大きく異なっており、その点においても搬入の可能性が示唆される。一方、中期の甕の中には、揖保川沿いの場所から採取された材料が使用されたかあるいはそこで作られた土器が搬入されたかいずれかの可能性を有するA 4類の土器が混在する。なお、A 4類の試料の胎土中砂分の粒径組成は、同様の組成がC類の試料にも認められることから、A 4類の

土器は、前期の土器で指摘したF 2類の土器のような地質背景を異にする地域からの搬入の可能性は高くない。

ところで、東南遺跡における縄文土器および土師器の胎土分析ではA 4類が多いことは既に述べたが、東南遺跡出土の弥生土器では、3点のうち2点がC類で1点がA 4類という結果が得られている。3点の中での傾向ではあるが、東南遺跡でも丁・柳ヶ瀬遺跡と同様に、弥生土器についてはC類が多いという可能性はある。丁・柳ヶ瀬遺跡では縄文土器の出土は確認されていないが、今後周辺域の遺跡において縄文土器と弥生土器との分析例が蓄積され、比較することができれば、縄文土器と弥生土器との間で、その材料に関わる事情の違いあるいは類似性が見出される可能性があると考えられる。

引用文献

猪木幸男，1981，20万分の1地質図幅「姫路」．地質調査所．

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高，1999，瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－．日本文化財科学会第16回大会発表要旨集，120-121．

山元孝広・栗本史雄・吉岡敏和，2000，龍野地域の地質．地域地質研究報告（5万分の1図幅），地質調査所，66p．

第5章 まとめ

第1節 要約

今回の都市計画街路網干線道路改良事業に伴い、丁・柳ヶ瀬遺跡の一面の調査を実施した。ここでは検出した遺構と遺物について検討する。調査により検出した遺構は弥生時代中期初頭と弥生時代中期中葉と古墳時代後期と平安時代のものがある。弥生時代中期初頭の遺構とそれ以降の弥生時代中期中葉と古墳時代後期と平安時代の遺構は検出した面が異なる。

弥生時代中期初頭の遺構には溝 SD12があり、ピット群が存在しているが、建物は建たない。溝 SD12からは弥生土器が出土している。壺と甕がある。壺26は広口壺 a で、壺27は広口壺 b である。壺26はⅠ－3期、壺27は多条化したヘラ描沈線を施文するためⅡ－1期に位置付けられる。壺28は口縁部の内面に施文があることからⅡ期に位置付けられる。甕35・36は逆L口縁甕 a で、35は無文であるが、36は口縁直下にヘラ描沈線で施文している。Ⅱ－1期に位置付けられる。

弥生時代中期中葉の遺構には溝 SD07・SD08・SD09がある。壺底部10、高坏脚11、く字口縁甕13はそれぞれの特徴からⅢ期に位置付けられる。

古墳時代後期の遺構には溝 SD01・SD05・SD06があり、弥生中期の土器も出土しているが7世紀初頭の須恵器坏Hの4・6があり、7世紀中葉の須恵器坏Gもあるため7世紀中葉に位置付けられる。

平安時代の遺構には土坑 SK01と溝 SD04があり、SK01からは壺、SD04からは坏Bが出土している。SK01の壺1は類例を知らないが、プロポーシオンから平安時代に位置付けられる。胎土分析の結果、播磨以外の岩石・鉱物組成を示している。坏Bの2は9世紀に位置付けられる。遺物は出土していないが、埋土の状況から土坑 SK02と溝 SD02・SD03が平安時代に想定できる。土坑 SK01は壺が土坑に設置された状況で出土しており、内容物は存在していなかったが火葬墓の可能性が高い。

以上、今回報告する遺構の時期は弥生時代中期初頭（Ⅱ－1期）、中期中葉（Ⅲ期）、古墳時代後期（7世紀）、平安時代（9世紀）の遺構を検出したが、溝が中心で住居など生活の中心となる遺構は検出できなかった。

土器の胎土分析は胎土中に含まれる鉱物片と岩石片の組成などから、土器の素材採取や製作地の特定をしようとするものであり、県下各地で継続して実施している。今回の丁・柳ヶ瀬遺跡の分析では A 2類・A 4類・C 4類・C 5類・C 6類・F 2類・H類の7種類に分類している。

C 4類・C 5類・C 6類とA 2類に分類した土器は微文象組織が認められる花崗岩類の岩石片が多く含まれ、角閃石や黒雲母などの有色鉱物片を伴わないことから、素材採取や製作地は大津茂川流域と推定している。実際に、丁・柳ヶ瀬遺跡ではこの分類の比率が高いことがわかり、このことは分析結果を裏付けるものである。A 4類に分類した土器は太子町東南遺跡で主体になるもので、鉱物・岩石組成が揖保川流域の地質分布と一致することから、素材採取や製作地を揖保川流域と推定している。F 2類に分類した土器は花崗岩類の岩石片を含まず、凝灰岩が多いという特徴を持っており、素材採取や製作地を桜山岩帯の北側の菅生川・夢前川流域と推定している。

H類に分類した須恵器は、チャートを多く含むが播磨平野に存在する凝灰岩や流紋岩・安山岩などが含まれていないため、素材採取や製作地は地域不詳であり、播磨地域以外を推定している。

以上のことから、丁・柳ヶ瀬遺跡の弥生土器の素材採取や製作地は大津茂川流域のものを主体としていることが判明した。周辺地域で素材採取や製作地として考えられるものとしては北東の菅生川・夢前

川流域と西側の揖保川流域のものが僅かに存在している。

平安時代の須恵器は播磨地域以外という結果は、考古学的特徴からも看取できるものである。今後、生産地を特定したい。

第2節 遺跡の範囲

過去の調査を含めた丁・柳ヶ瀬遺跡の概略を見ることにする。

丁・柳ヶ瀬遺跡の初源は昭和55年度の調査において、縄文時代中期末の土器が良好な状態で出土しており、近隣のたつの市清水遺跡などで竪穴住居が調査されており、丁・柳ヶ瀬遺跡でも今後付近に竪穴住居が見つかる可能性がある。

弥生時代前期末から中期初頭と弥生時代中期中葉の遺構は平成15年度の姫路市教育委員会の調査で竪穴住居を調査しており、土器も多量に出土している。弥生時代後期の遺構は平成18年度の姫路市教育委員会の調査で竪穴住居を調査している。古墳時代初頭の遺構は昭和55年度の兵庫県教育委員会がC地区で竪穴住居 SI01・SI02や平成15年度に姫路市教育委員会が竪穴住居を調査しているほか、C地区で土坑や溝・自然流路などを調査している。丁瓢塚古墳の築造時期と共通するものがあり、丁瓢塚古墳と丁・柳ヶ瀬遺跡は奈良県纏向遺跡と箸墓古墳と同様の関係が想定できる。このことから弥生時代前期末から古墳時代初頭にかけて継続的に集落を形成していることが判明しており、拠点的な集落になる可能性が高い。また、南西1kmで姫路市教育委員会が調査を実施した和久遺跡との関係も注目される。

古墳時代後期の遺構は溝のみの検出であるが、集落の存在が想定できる。この時期の墓域は丁・柳ヶ瀬遺跡の東側に存在する勝山古墳群や丁古墳群であり、これらを形成した集落の一部として捉えることができるだろう。

奈良時代の遺構は昭和55年度の兵庫県教育委員会がC-5地区の自然流路を検出しており、多量の土器が出土している。「大伴」を含む多数の墨書土器も出土している。

平安時代の遺構は溝・自然流路・火葬墓が見つかっており、溝と自然流路は条里地割りとは無関係である。したがって、条里地割の施工が下がる可能性がある。

以上、丁・柳ヶ瀬遺跡は縄文時代中期から平安時代にわたり長期間継続する遺跡であることが判明した。特に弥生時代中期・後期・古墳時代初頭は竪穴住居を検出しており、拠点的な集落であると考えられる。ただし、丁・柳ヶ瀬遺跡の面積38.5haの内、点的な調査が僅かしか進んでいないため、今後の調査の進展を期待したい。

参考文献

- ・篠宮 正「東播磨地域における弥生土器編年」『弥生土器集成と編年—播磨編—』大手前大学史学研究所 2007年
- ・太子町教育委員会『川島・立岡遺跡』 1971年
- ・太子町教育委員会・建設省姫路工事事務所『山田遺跡』 1975年
- ・太子町教育委員会『播磨団鵜荘現況調査報告Ⅲ』 1990年
- ・太子町教育委員会『播磨国鵜荘現況調査報告Ⅳ』 1991年
- ・太子町教育委員会『播磨国鵜荘現況調査報告Ⅵ』 1994年
- ・太子町教育委員会『南柳遺跡の調査』太子町文化財資料第45集 1994年

- ・太子町教育委員会『内山戸古墳群』太子町文化財資料第50集 1995年
- ・太子町教育委員会『常全日蓮寺遺跡の調査』太子町文化財資料第51集 1995年
- ・太子町教育委員会『南柳遺跡』 1997年
- ・太子町教育委員会『船塚遺跡の調査』太子町文化財資料第52集 1998年
- ・太子町教育委員会『立岡笹山遺跡の調査』太子町文化財資料第57集 1999年
- ・太子町教育委員会『平成15・16年度埋蔵文化財調査年報』太子町文化財資料第73集 2006年
- ・太子町教育委員会『平成17・18・19年度埋蔵文化財調査年報』太子町文化財資料第74集 2008年
- ・太子町史編集専門委員会『太子町史』第1巻 1996年
- ・太子町史編集専門委員会『太子町史』第3巻 1989年
- ・龍野市教育委員会『山陽新幹線建設地内兵庫県埋蔵文化財調査報告書』 1971年
- ・龍野市教育委員会『片吹遺跡』龍野市文化財調査報告書VI 1985年
- ・東洋大学付属姫路高等学校考古学研究会『姫路丁古墳群』 1966年
- ・東洋大学付属姫路高等学校考古学研究会『播磨土師器の研究』 1973年
- ・姫路市教育委員会『TUBOHORI 平成7年度（1995）姫路市埋蔵文化財略報』 1997年
- ・姫路市教育委員会『TUBOHORI 平成8年度（1996）姫路市埋蔵文化財略報』 1998年
- ・姫路市教育委員会『TUBOHORI 平成6年度（1994）姫路市埋蔵文化財略報』 1999年
- ・姫路市教育委員会『TUBOHORI 平成9年度（1997）姫路市埋蔵文化財略報』 1999年
- ・姫路市教育委員会『TUBOHORI 平成10年度（1998）姫路市埋蔵文化財略報』 2000年
- ・姫路市教育委員会『TUBOHORI 平成11年度（1999）姫路市埋蔵文化財略報』 2001年
- ・姫路市教育委員会『TUBOHORI 平成12年度（2000）姫路市埋蔵文化財略報』 2002年
- ・姫路市教育委員会『TUBOHORI 平成13年度（2001）姫路市埋蔵文化財略報』 2003年
- ・姫路市立飾磨高等学校郷土研究班『姫路市遺跡地名表』 1967年
- ・兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地名表』 1965年
- ・兵庫県教育委員会『兵庫県埋蔵文化財特別地域遺跡分布地図及び地名表 第2集』 1968年
- ・兵庫県教育委員会『山陽新幹線建設地内兵庫県埋蔵文化財調査報告』兵庫県文化財調査報告第4冊 1971年
- ・兵庫県教育委員会『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』 1982年
- ・兵庫県教育委員会『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和55年度 1982年
- ・兵庫県教育委員会『丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第30冊 1985年
- ・兵庫県教育委員会『福田片岡遺跡』兵庫県文化財調査報告第94冊 1991年
- ・兵庫県教育委員会『西脇古墳群』兵庫県文化財調査報告第141冊 1995年
- ・兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地図』第1・2分冊 2004年
- ・兵庫県教育委員会『亀田遺跡（第2分冊）』兵庫県文化財調査報告第209冊 2000年
- ・兵庫県教育委員会『亀田遺跡（第1分冊）』兵庫県文化財調査報告第210冊 2000年
- ・兵庫県教育委員会『太市中古墳群』兵庫県文化財調査報告第258冊 2003年
- ・増田重信『姫路市の先史遺跡』1963年
- ・御津町教育委員会『碓岩南山遺跡Ⅰ』 1995年
- ・「角川日本地名大辞典」編纂委員会『角川日本地名大辞典23兵庫県』角川書店 1988年
- ・今井林太郎監修『日本歴史地名大系29Ⅱ 兵庫県の地名Ⅱ』平凡社 1999年

第3表 丁・柳ヶ瀬遺跡出土土器一覽

報告番号	版図	写真図版	種別	器種	部位	調査番号	遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	実測番号
1	12	10	須恵器	壺	口縁部～底部	980103	SK01	(11.2)	24.0	8.6	17
2	12	10	須恵器	坏	底部	980103	SD04	—	1.3+	(11.8)	21
3	12	10	須恵器	坏	口縁部	980103	SD01	(8.2)	1.6+	—	19
4	12	10	須恵器	坏	口縁部	980103	SD01	(14.0)	2.9+	—	18
5	12	10	弥生土器	壺	口縁部	980103	SD01	(20.3)	1.9+	—	20
6	12	10	須恵器	坏	口縁部	980103	SD06	(15.4)	2.0+	—	24
7	12	10	弥生土器	甕	底部	980103	SD06	—	4.6+	(10.1)	25
8	12	10	須恵器	甗	頸部～体部	980103	SD05	—	6.3+	—	23
9	12	10	弥生土器	甕	底部	980103	SD05	—	2.4+	4.5	22
10	12	11	弥生土器	壺	底部	980103	SD07	—	5.6+	(8.8)	26
11	12	11	弥生土器	高坏	脚部	980103	SD08	—	3.5+	(14.3)	27
12	12	11	弥生土器	無頸壺	口縁部	980103	SD09	12.8	4.4+	—	30
13	12	11	弥生土器	甕	口縁部	980103	SD09	(16.4)	4.4+	—	28
14	12	11	弥生土器	甕	底部	980103	SD09	—	2.9+	7.6	29
15	12	11	弥生土器	甕	底部	980103	SD10	—	2.4+	6.0	31
16	12	11	弥生土器	壺	口縁部	980103	P01	(24.3)	0.9+	—	40
17	12	11	弥生土器	甕	底部	980103	P04	—	3.9+	5.0	41
18	12	11	須恵器	椀	口縁部	980103		(13.7)	1.6+	—	32
19	12	11	弥生土器	壺	口頸部	980103		(18.5)	2.7+	—	39
20	12	11	弥生土器	壺	口縁部	980103		(12.6)	4.6+	—	34
21	12	11	弥生土器	蓋	底部	980103		—	4.8+	(18.4)	37
22	12	11	弥生土器	甕	底部	980103		—	6.1+	5.2	35
23	12	11	弥生土器	甕	底部	980103		—	4.1+	6.0	33
24	12	11	弥生土器	甕	底部	980103		—	3.1+	5.0	38
25	12	11	弥生土器	甕	底部	980103		—	3.6+	6.3	36
26	13	12	弥生土器	壺	頸部～底部	980103	SD12	—	(20.6)+	11.0	03・05
27	13	12	弥生土器	壺	頸部	980103	SD12	—	8.7+	—	10
28	13	12	弥生土器	壺	口縁部	980103	SD12	—	2.2+	—	16
29	13	12	弥生土器	壺	口縁部	980103	SD12	(12.4)	3.0+	—	14
30	13	12	弥生土器	甕	口縁部	980103	SD12	(20.0)	4.5+	—	13
31	13	12	弥生土器	壺	底部	980103	SD12	—	10.3+	13.3	04
32	13	12	弥生土器	壺	底部	980103	SD12	—	10.7+	12.8	07
33	13	12	弥生土器	壺	底部	980103	SD12	—	6.9+	10.7	06
34	13	12	弥生土器	壺	底部	980103	SD12	—	6.1+	11.6	09
35	13	13	弥生土器	甕	口縁部～体部	980103	SD12	(20.5)	12.3+	—	08
36	13	13	弥生土器	甕	口縁部	980103	SD12	(22.4)	2.5+	—	12
37	13	13	弥生土器	甕	体部	980103	SD12	—	6.8+	—	15
38	13	13	弥生土器	甕	底部	980103	SD12	—	4.5+	10.3	01
39	13	13	弥生土器	甕	底部	980103	SD12	—	7.1+	9.0	02
40	13	13	弥生土器		底部	980103	SD12	—	3.4+	4.2	11

第4表 丁・柳ヶ瀬遺跡出土石器一覽

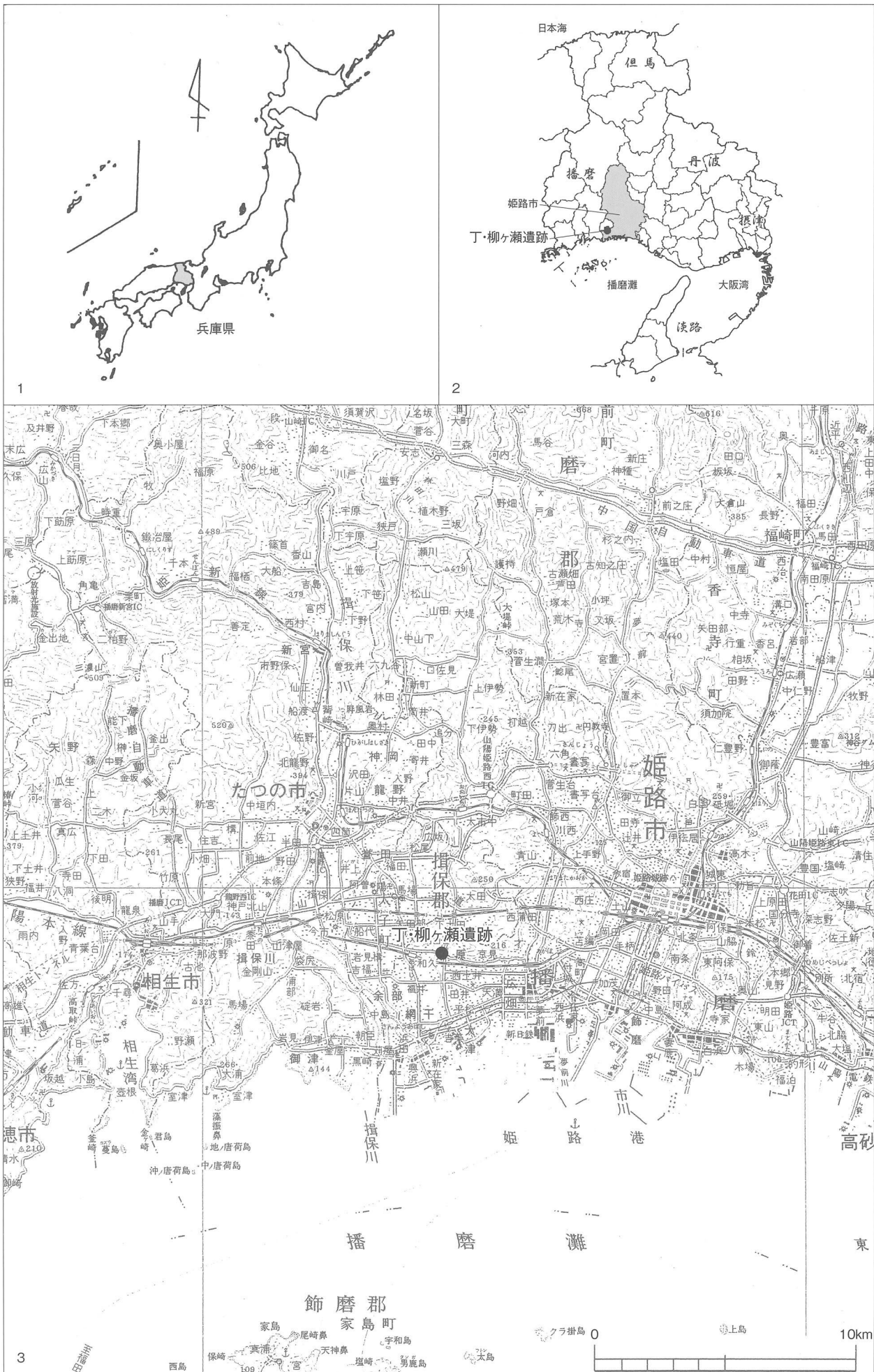
報告番号	版図	写真図版	種別	器種	調査番号	遺構	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	実測番号
S1	14	14	石器	削器	980103	SD06	60.0	39.0	10.0	28.0	S4
S2	14	14	石器	削器	980103	SD07	42.5	37.0	9.5	13.8	S7
S3	14	14	石器	削器	980103	—	60.0	35.5	8.0	18.0	S3

報告書抄録

ふりがな	よろやながせいせき							
書名	丁・柳ヶ瀬遺跡Ⅱ							
副書名	都市計画街路網干線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第350冊							
編著者名	篠宮 正・パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500 Tel 079-437-5589							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10-1 Tel 078-341-7711							
発行年月日	2009（平成21）年3月18日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
丁・柳ヶ瀬遺跡	兵庫県姫路市勝原区丁	28225	020327	35度17分9秒	134度58分47秒	確認調査 (920369) 1993年2月8日 (970345) 1997年10月27日 ～28日 (2000126) 2000年7月18日 本発掘調査 (980103) 1998年8月3日 ～11日	確認調査 85㎡ 30㎡ 16㎡ 本発掘調査 133㎡	都市計画街路網干線道路改良事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
丁・柳ヶ瀬遺跡	集落	弥生時代 古墳時代 平安時代	溝 溝 土坑・溝	弥生土器・削器 須恵器 須恵器・土師器				
要約	<p>丁・柳ヶ瀬遺跡の南端の一面の調査を実施した。遺構検出面2面ある。下層は弥生時代中期初頭（Ⅱ-1期）の溝を検出した。上層は耕作土直下で弥生時代中期中葉（Ⅲ期）の溝と古墳時代後期（7世紀）の溝と平安時代（9世紀）の土坑と溝を検出した。</p> <p>平安時代の土坑 SK01は壺が土坑に設置された状況で出土しており、内容物は存在していなかったが火葬墓の可能性が高い。</p>							

*緯度・経度は平成14年4月1日施行の測量法改正による世界測地系にもとづく値である。

圖 版



1 兵庫県の位置 2 姫路市の位置 3 丁・柳ヶ瀬遺跡の位置 (1/200,000)

図版3	遺跡番号	遺跡の名称	遺跡の所在地	時代	種類
1	450019	坊主山遺跡	揖保郡太子町佐用岡	旧石器・縄文・平安	集落
2	450238	桜ヶ坪?示石	揖保郡太子町佐用岡	中世	その他
3	450023	平方壺丁田遺跡	揖保郡太子町佐用岡	古墳	散布地
4	450022	平方高田遺跡	揖保郡太子町佐用岡	古墳	散布地
5	450024	平方宮ノ本遺跡	揖保郡太子町佐用岡	弥生・古墳・中世	集落
6	450025	平方遺跡	揖保郡太子町佐用岡	縄文～古墳・平安・中世	集落
7	450026	南柳遺跡	揖保郡太子町佐用岡	弥生・古墳・中世・近世	集落
8	450063	松田山古墳	揖保郡太子町佐用岡	古墳	古墳
9	450064	柳山古墳	揖保郡太子町佐用岡	古墳	古墳
10	450065	坊主山古墳	揖保郡太子町佐用岡	古墳	古墳
11	450027～450031	東保山古墳群	揖保郡太子町佐用岡	古墳	古墳
12	450018	助久五反畑遺跡	揖保郡太子町佐用岡	縄文～古墳	集落
13	450005	城山遺跡	揖保郡太子町鶴	縄文～古墳・中世	集落・城館
14	450012	鶴居跡	揖保郡太子町鶴	中世	集落
15	450017	鶴遺跡	揖保郡太子町鶴	縄文・弥生・中世	集落
16	450016	鶴石田遺跡	揖保郡太子町鶴	弥生・古墳	集落
17	450079	東保高田遺跡	揖保郡太子町東保	弥生・古墳	散布地
18	450080	キツネ岩遺跡	揖保郡太子町東保	中世	散布地
19	450078	東保遺跡	揖保郡太子町東保	古墳	散布地
20	450071～450076	丹生山古墳群	揖保郡太子町東保	古墳	古墳
21	450068～450070	丹生山古墳群	揖保郡太子町東保	古墳	古墳
22	450077	中出遺跡	揖保郡太子町東保	縄文・古墳・中世	散布地
23	450081	東南遺跡	揖保郡太子町東南	縄文・弥生・中世	集落
24	450230	佐田構居跡	揖保郡太子町東南	中世	集落
25	450084	栗原遺跡	揖保郡太子町東南	古墳・中世	散布地
26	450206	立岡東遺跡	揖保郡太子町立岡	中世	集落
27	450224	立岡笹山遺跡	揖保郡太子町立岡	中世	散布地
28	450211	蓮常寺東遺跡	揖保郡太子町蓮常寺	古墳・中世	散布地
29	450215	(仮)高田区整遺跡	揖保郡太子町糸井	弥生	散布地
30	450237	矢田部西遺跡	揖保郡太子町矢田部	中世	散布地
31	450083	矢田部遺跡	揖保郡太子町矢田部	弥生・中世	散布地
32	450082	矢田部城跡	揖保郡太子町矢田部	中世	城館
33	450085～450229	檀特山西古墳群	揖保郡太子町矢田部	古墳	古墳
34	450061	王子遺跡	揖保郡太子町王子	弥生	散布地
35	450239	松ヶ下北遺跡	揖保郡太子町松ヶ下	縄文～古墳	集落
36	450062	松ヶ下遺跡	揖保郡太子町松ヶ下	弥生	散布地
37	450066	沼田古墳	揖保郡太子町沼田	古墳	古墳
38	450067	沼田遺跡	揖保郡太子町沼田	弥生	散布地
39	450051	亀田遺跡	揖保郡太子町上太田	弥生・古墳・中世	集落
40	450056～450058	上太田古墳群	揖保郡太子町上太田	古墳	古墳
41	450059	裏ノ谷遺跡	揖保郡太子町上太田		散布地
42	450109	楯岩城跡	揖保郡太子町太田	中世	城館
43	450110～450114	城山古墳群	揖保郡太子町太田	古墳	古墳
44	450093～450101・450241・450242	黒岡古墳群	揖保郡太子町太田	古墳	古墳
45	450102	黒岡10号墳	揖保郡太子町太田	古墳	古墳
46	450103	黒岡11号墳	揖保郡太子町太田	古墳	古墳
47	450104	黒岡神社古墳	揖保郡太子町太田	古墳	古墳
48	450107	田中遺跡	揖保郡太子町太田	弥生・古墳	散布地
49	450115～450122・450243	天神山古墳群	揖保郡太子町太田	古墳	古墳
50	450108	原坂遺跡	揖保郡太子町太田	弥生・古墳	散布地
51	450106	黒岡山古墳	揖保郡太子町太田	古墳	古墳
52	450105	黒岡山墳丘墓	揖保郡太子町太田	弥生	墳墓
53	450091	大津茂川床遺跡	揖保郡太子町太田	縄文・弥生	散布地
54	450144～450151	山田大山古墳群	揖保郡太子町山田	古墳	古墳
55	450167	山田遺跡	揖保郡太子町山田	弥生	集落
56	450171	山田畑山遺跡	揖保郡太子町山田	古墳	散布地
57	450132～450137	郷ノ谷古墳群	揖保郡太子町原	古墳	古墳
58	450138～450143	北山古墳群	揖保郡太子町原	古墳	古墳
59	450123～450131	鷺山古墳群	揖保郡太子町原	古墳	古墳
60	450186	原沼遺跡	揖保郡太子町原	弥生	散布地
61	450188～450193	塚村古墳群	揖保郡太子町原	古墳	古墳
62	020329・450214	朝日山遺跡	姫路市勝原区朝日谷・揖保郡太子町糸井	古墳	散布地
63	020330	朝日山城跡	姫路市勝原区朝日谷	中世	城館
64	020331～020333	朝日山古墳群	姫路市勝原区朝日谷	古墳	古墳
65	020315～020321	壇特山古墳群	姫路市勝原区下太田	古墳	古墳
66	020323・450090	壇特山山頂遺跡	姫路市勝原区下太田・揖保郡太子町矢田部	弥生	集落
67	020322	壇特山遺跡	姫路市勝原区下太田	弥生・古墳	集落・古墳
68	020910・450092	川島遺跡	姫路市勝原区下太田・揖保郡太子町太田	弥生～中世	集落
69	020326	ツクワ遺跡	姫路市勝原区下太田	弥生～中世	集落
70	020325	下太田廃寺	姫路市勝原区下太田	奈良	寺院
71	020324	下太田遺跡	姫路市勝原区下太田	弥生・古墳	集落
72	020327	丁・柳ヶ瀬遺跡	姫路市勝原区丁	縄文～平安	集落
73	020328	瓢塚古墳	姫路市勝原区丁	古墳	古墳
74	020348	薬司古墳	姫路市勝原区丁	古墳	古墳
75	020349	丁古墳群1号墳	姫路市勝原区丁	古墳	古墳
76	020351	丁山頂古墳	姫路市勝原区丁	古墳	古墳
77	020350・020352～020354	丁古墳群	姫路市勝原区丁	古墳	古墳
78	020347・020581～020596	山戸古墳群	姫路市勝原区山戸	古墳	古墳
79	020346	山戸4号墳	姫路市勝原区山戸	古墳	古墳
80	020355～020359	勝山町古墳群	姫路市勝原区勝山町	古墳	古墳
81	020340	茶屋遺跡	姫路市勝原区宮田	弥生	集落
82	020341	山戸遺跡	姫路市勝原区山戸	弥生	集落
83	020342	南山戸遺跡	姫路市勝原区山戸	弥生・古墳	集落
84	020335	(仮)高田区整遺跡第1地点	姫路市網干区高田	弥生	集落
85	020336	(仮)高田区整遺跡第2地点	姫路市網干区高田	弥生～中世	集落
86	020337	(仮)高田区整遺跡第3地点	姫路市網干区高田	奈良～中世	その他
87	020334	関ノ口遺跡	姫路市網干区和久	他	散布地
88	020338	和久遺跡	姫路市網干区和久	弥生・古墳	集落
89	020339	坂出遺跡	姫路市網干区坂出	縄文・弥生	散布地
90	020343	魚吹津構跡	姫路市網干区宮内	中世	城館
91	020345	辺作遺跡	姫路市大津区天満	縄文～中世	散布地
92	020344	古網干遺跡	姫路市網干区垣内南町	奈良～中世	集落

丁・柳ヶ瀬遺跡周辺の主要遺跡一覧



丁・柳ヶ瀬遺跡周辺の主要遺跡 (1/25,000)

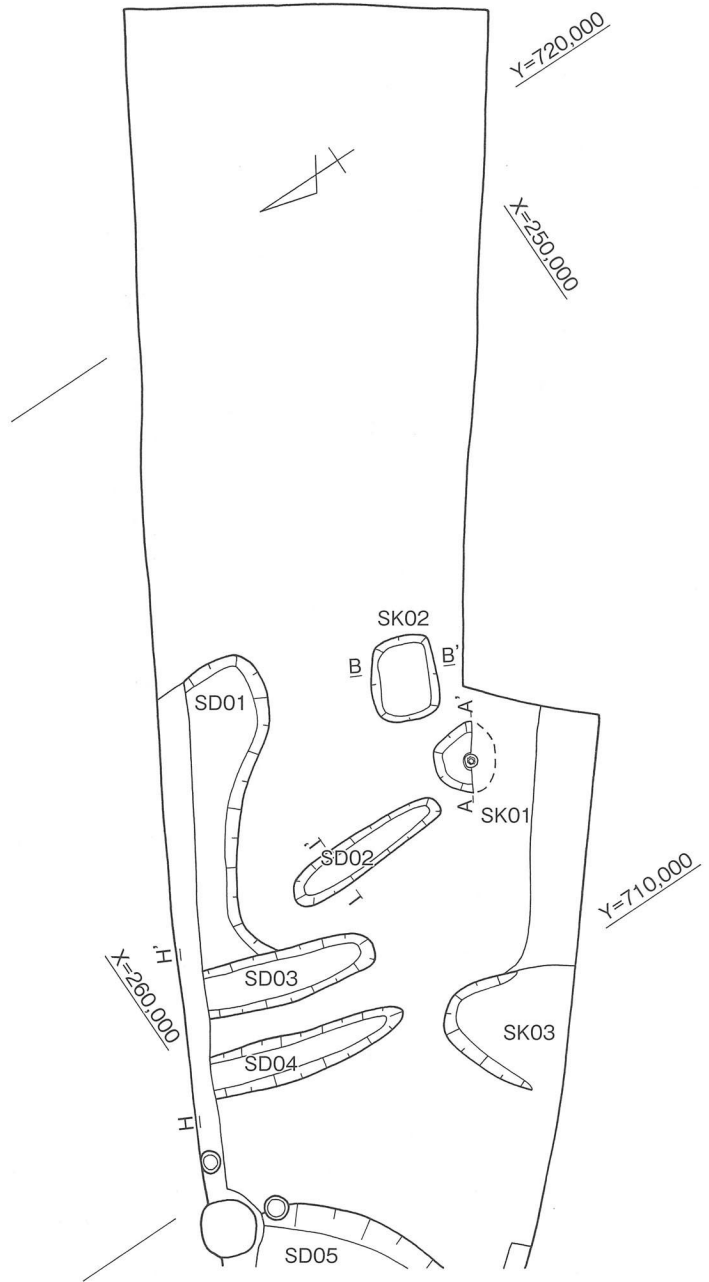
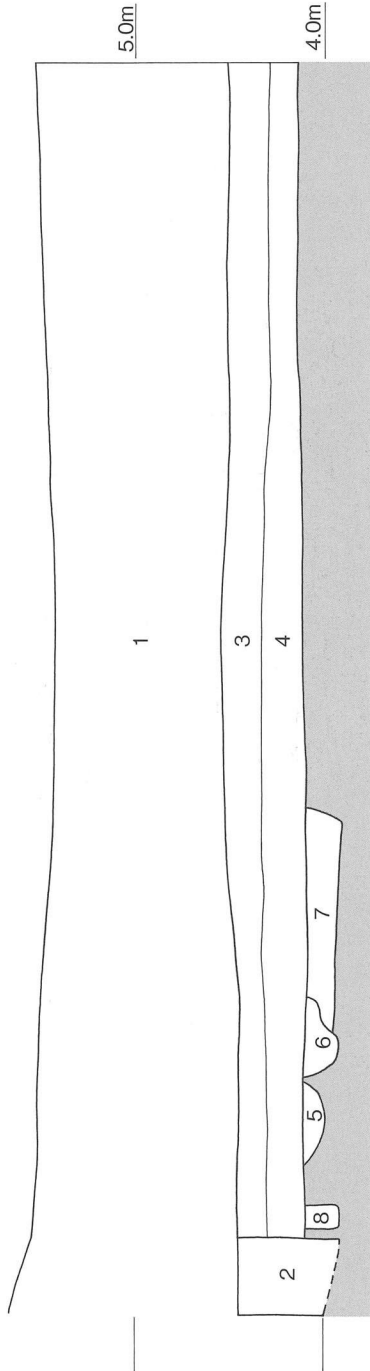
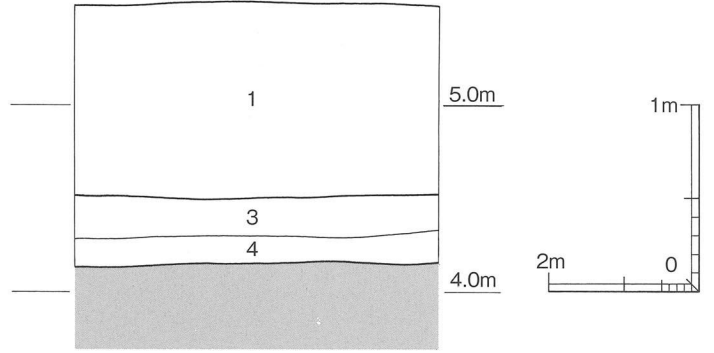


確認調査と本発掘調査の位置 (1/1,000)

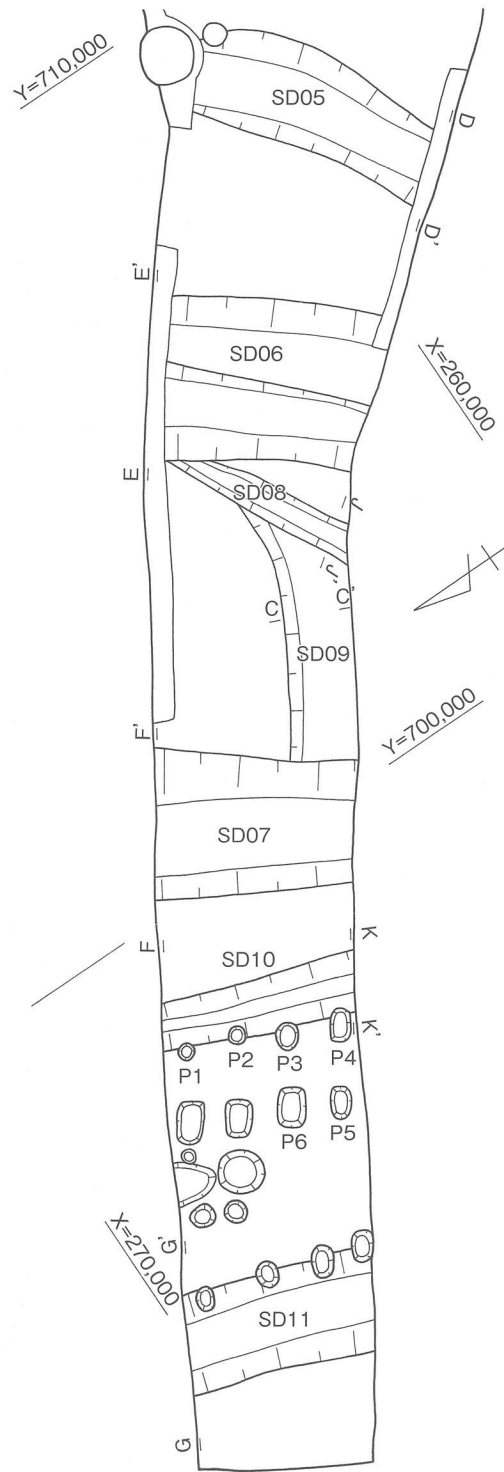
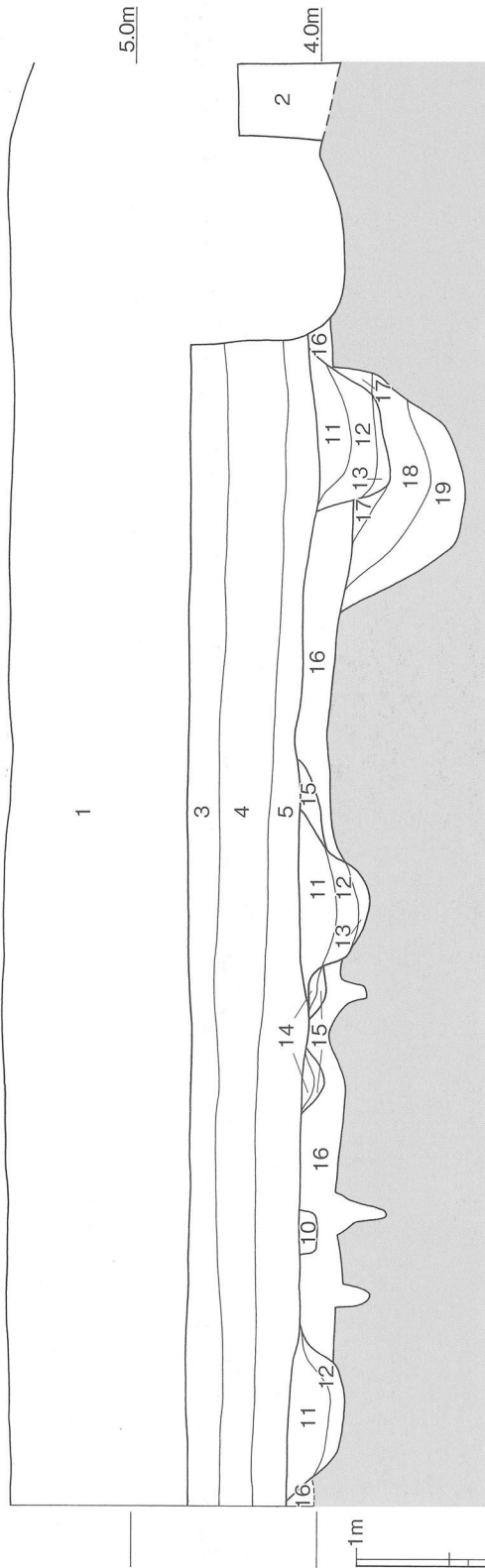
図版 6

遺構

- | | |
|----------------------------|-----------------------------|
| 1. [盛土] | 11. 暗灰褐 シルト質極細砂
(灰 極細砂含) |
| 2. [井土埋土] | 12. 灰 極細砂 (下部にFe) |
| 3. 灰 シルト質極細砂 [耕作土] | 13. 褐 極細砂
(小礫含、Fe多量に含) |
| 4. 褐 シルト質極細砂 [床土] | 14. 灰 極細砂 |
| 5. 暗黄褐 シルト質極細砂 | 15. 褐 極細砂 (Fe含) |
| 6. 灰白 シルト質極細砂 [SD04] | 16. 灰褐 シルト質極細砂 |
| 7. 灰 シルト質極細砂 [SD03] | 17. 暗灰 シルト |
| 8. 暗灰 シルト質極細砂 (Mn含) [SD01] | 18. 暗白 シルト |
| 9. 暗灰 シルト [Pit] | 19. 黒 シルト |
| 10. 褐 極細砂 | |



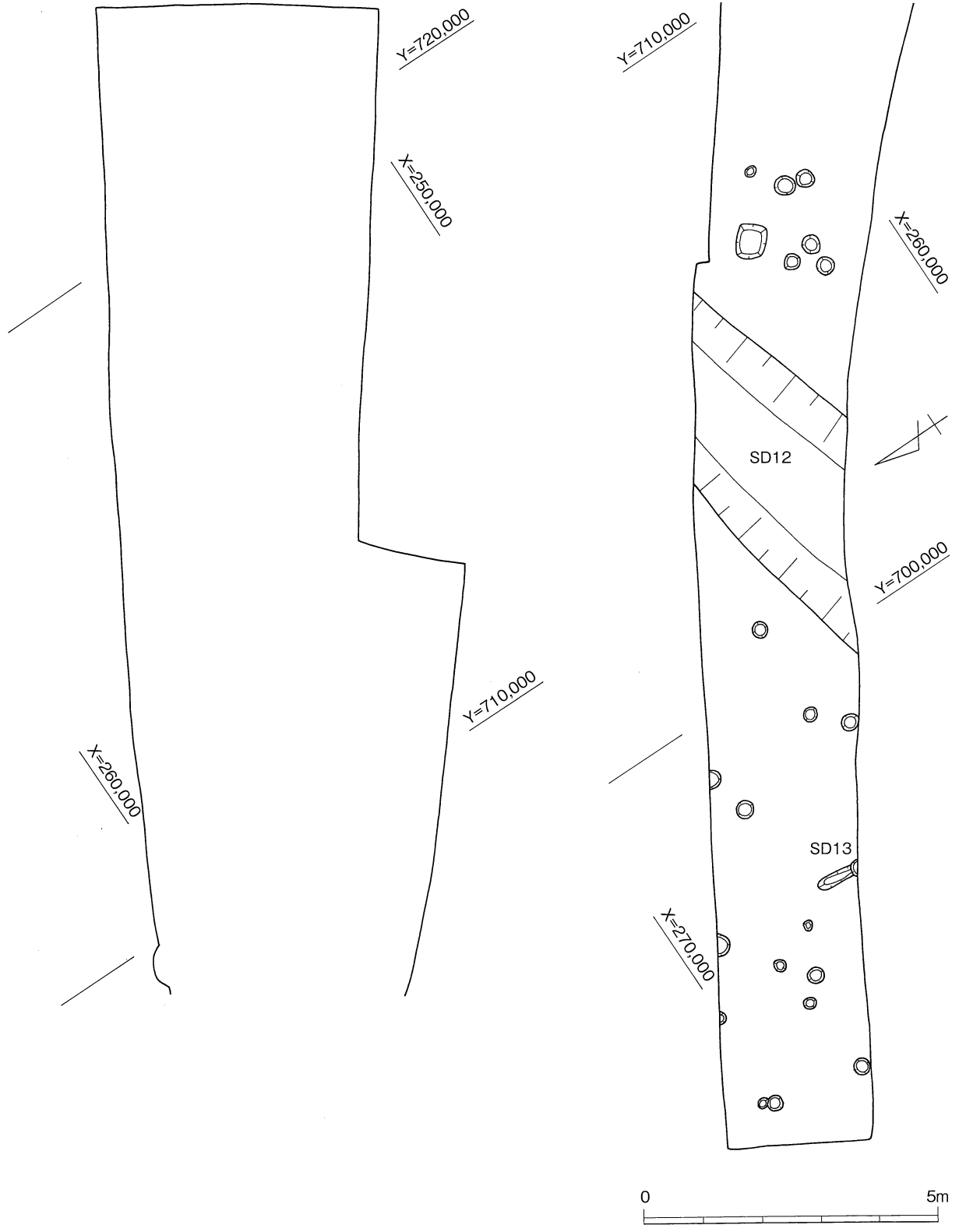
東半上層遺構平面・断面 (1/100・1/40)



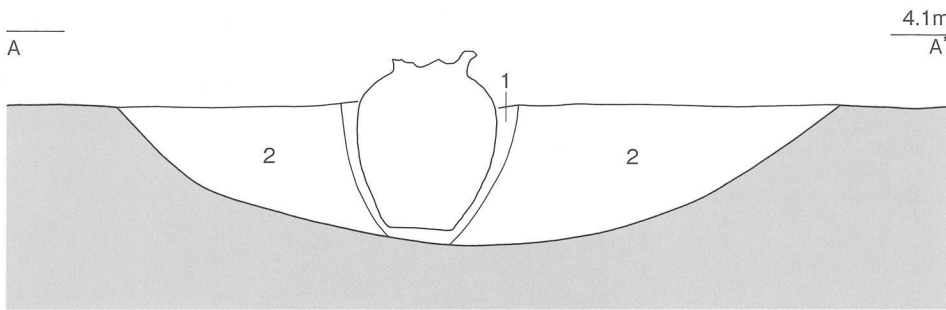
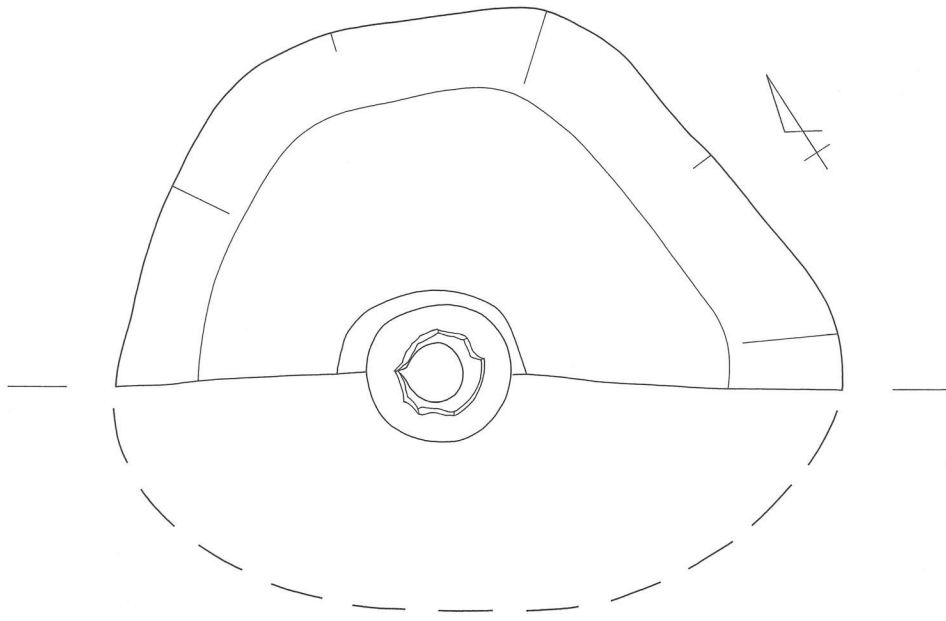
- | | |
|-------------------------|-----------------------|
| 1. [盛土] | 11. 暗灰褐シルト質極細砂(灰極細砂含) |
| 2. [井土埋土] | 12. 灰極細砂(下部にFe) |
| 3. 灰シルト質極細砂[耕作土] | 13. 褐極細砂(小礫含、Fe多量に含) |
| 4. 褐シルト質極細砂[床土] | 14. 灰極細砂 |
| 5. 暗黄褐シルト質極細砂 | 15. 褐極細砂(Fe含) |
| 6. 灰白シルト質極細砂[SD04] | 16. 灰褐シルト質極細砂 |
| 7. 灰シルト質極細砂[SD03] | 17. 暗灰シルト |
| 8. 暗灰シルト質極細砂(Mn含)[SD01] | 18. 暗白シルト |
| 9. 暗灰シルト[Pit] | 19. 黒シルト |
| 10. 褐極細砂 | |

西半上層遺構平面・断面 (1/100・1/40)

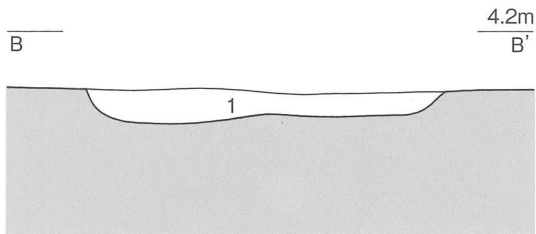
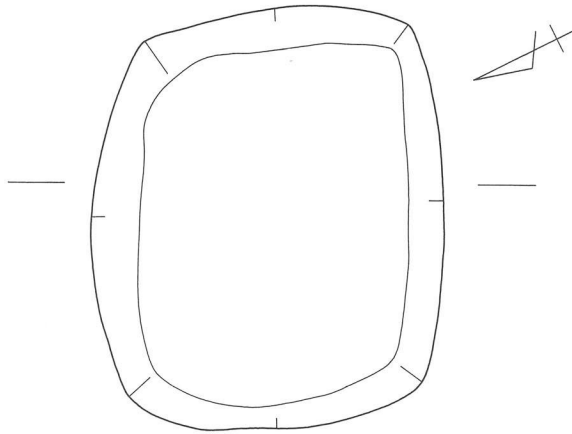
図版 8
遺構



下層遺構平面 (1/100)

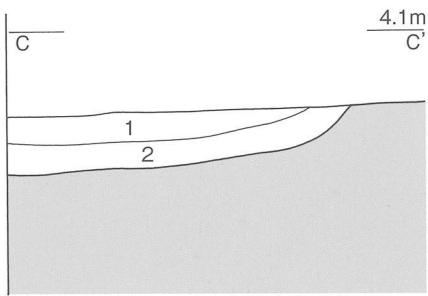


SK01 1. 褐 シルト質極細砂 (Mn含) 2. 灰褐 粗砂~細砂 (小礫含)

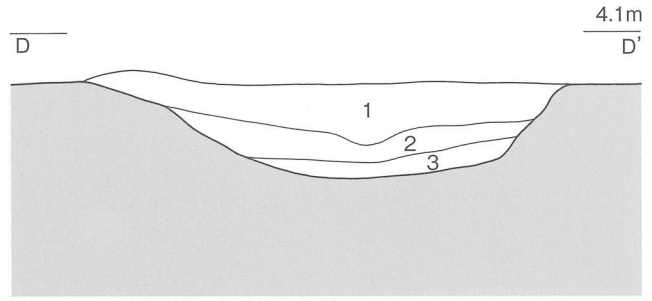


SK02 1. 暗灰 シルト質極細砂 (Mn含)

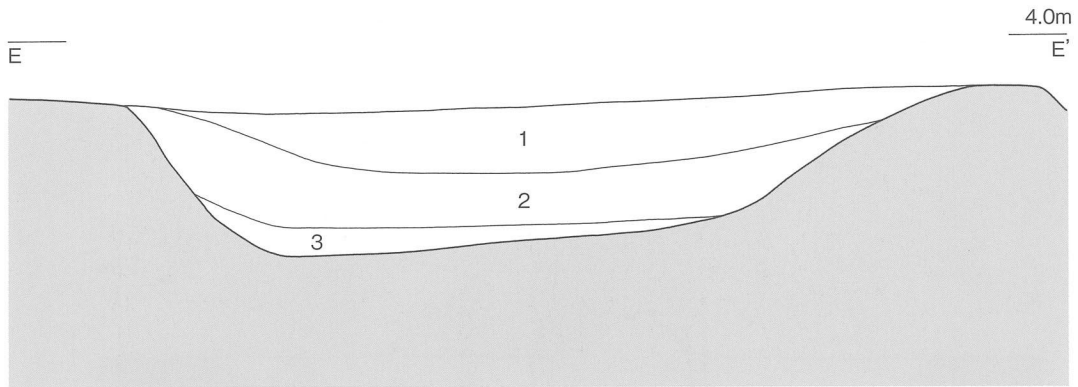




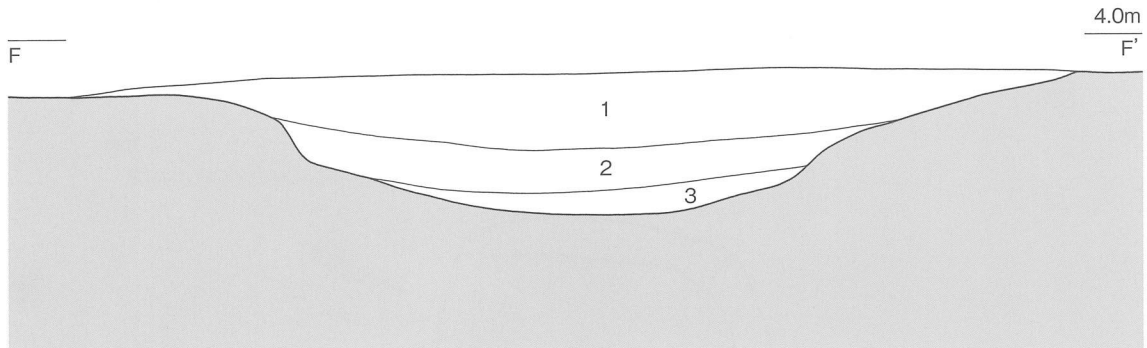
SD09 1. 褐 シルト質極細砂 (Mn含)
2. 灰 極細砂 (下層に Mn含)



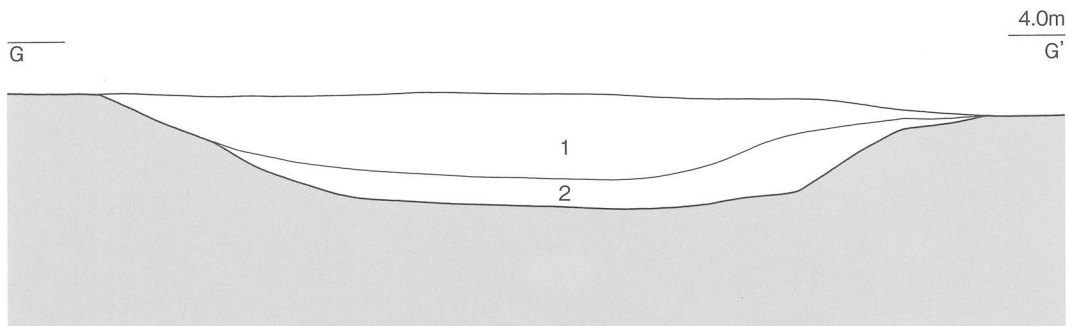
SD05 1. 灰褐 シルト (上部 Fe含)
2. 白 極細砂
3. 褐 極細砂 (小礫含)



SD06 1. 暗灰褐 シルト質極細砂 (灰 極細砂含)
2. 灰 極細砂 (下部に Fe含)
3. 褐 極細砂 (小礫含、Fe多量に含)

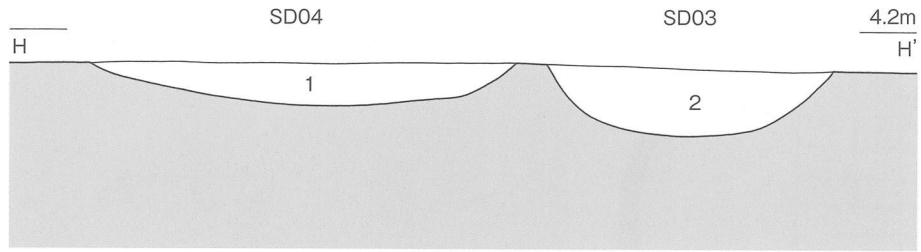


SD07 1. 暗灰褐 シルト質極細砂 (灰 極細砂含)
2. 灰 極細砂 (下部に Fe含)
3. 褐 極細砂 (小礫含、Fe多量に含)

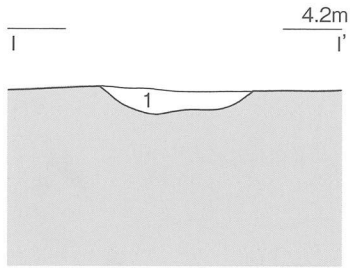


SD011 1. 暗灰褐 シルト質極細砂 (灰 極細砂含)
2. 灰 極細砂 (下部に Fe含)

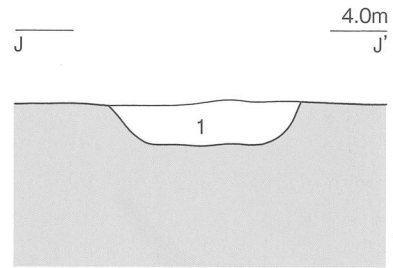




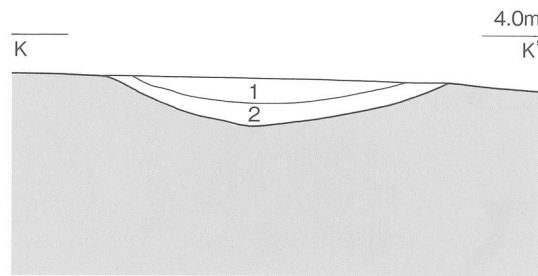
SD04・SD03 1. 灰白シルト質極細砂
2. 灰シルト質極細砂



SD02 1. 灰白極細砂（最底にMn多く含）

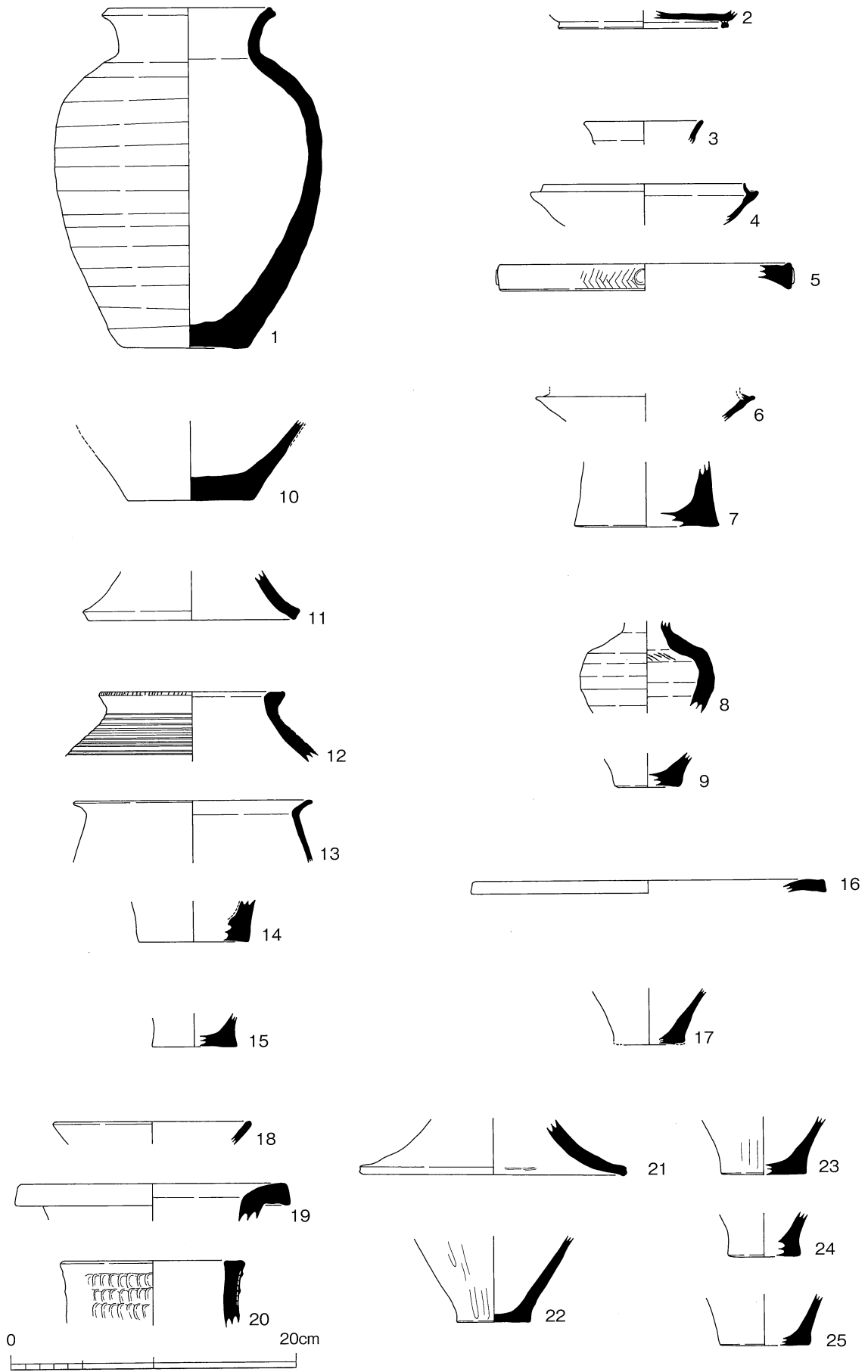


SD08 1. 灰白シルト質極細砂

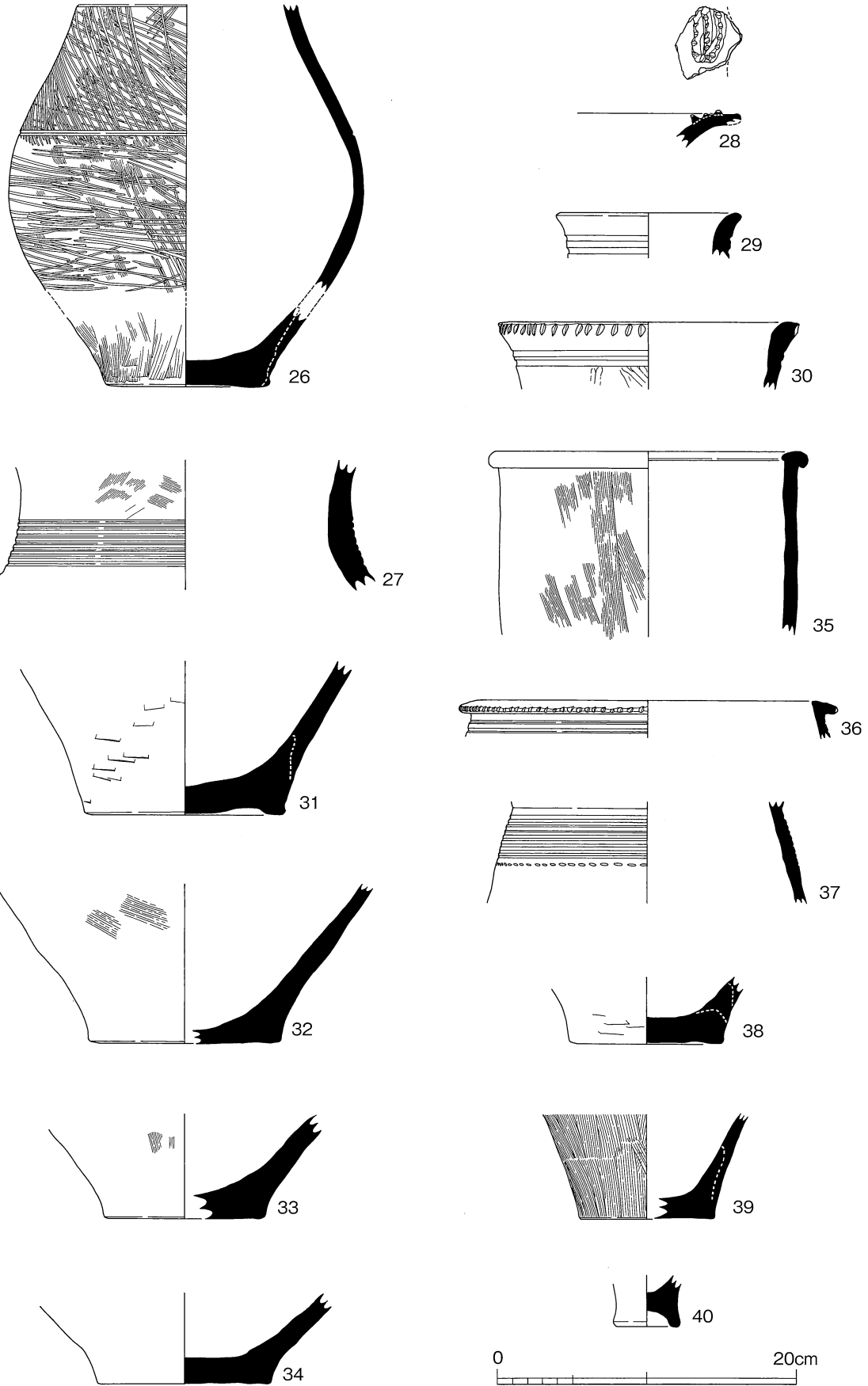


SD10 1. 灰極細砂
2. 褐極細砂 (Fe含)



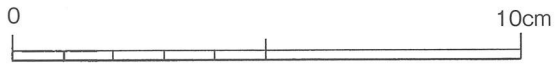
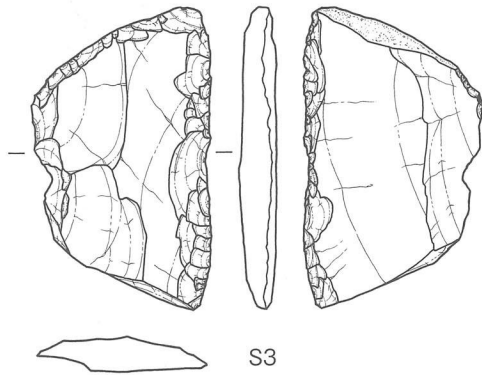
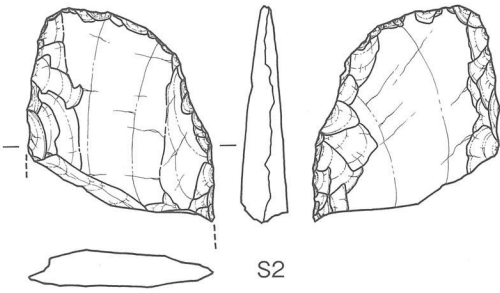
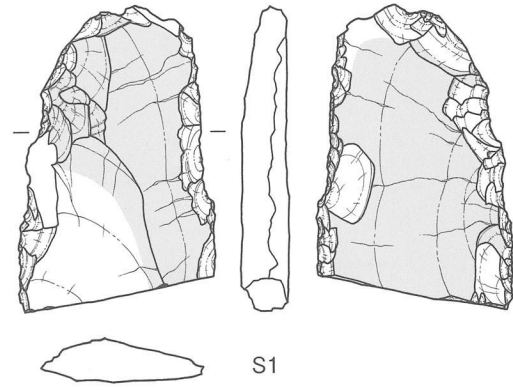


上層遺構・包含層出土土器 (1~25)



SD12出土土器 (26~40)

图版 14
遺構



写
真
图
版



1 丁・柳ヶ瀬遺跡周辺 遠景（真上から）



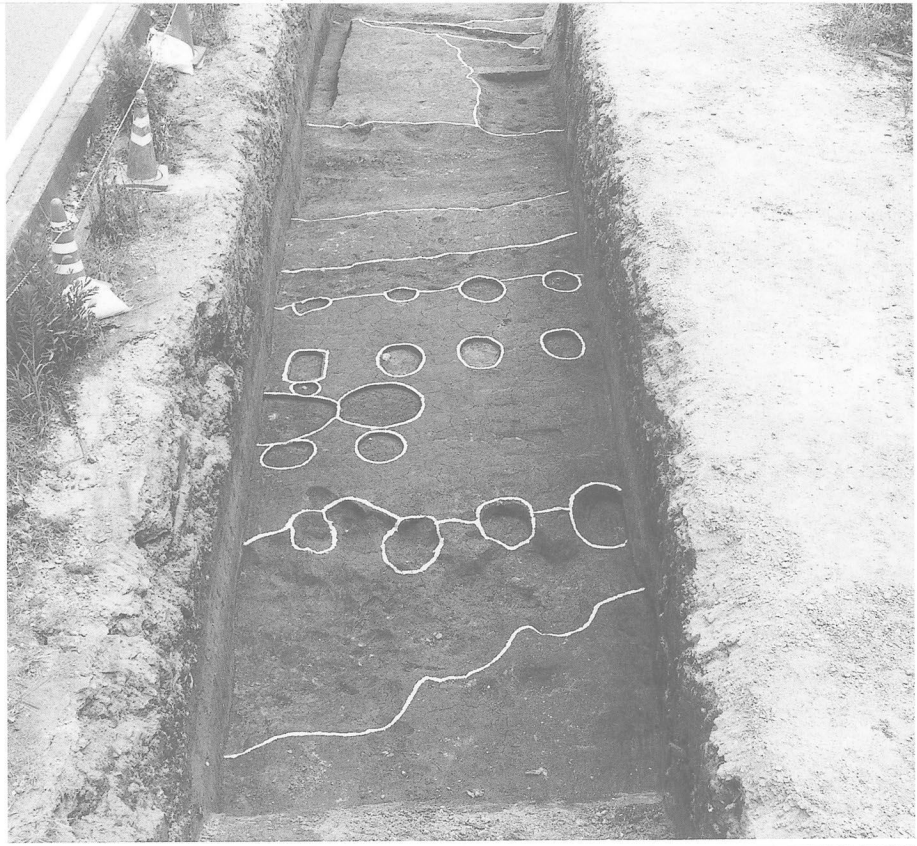
2 丁・柳ヶ瀬遺跡 遠景（真上から）



3 上層 全景（西から）



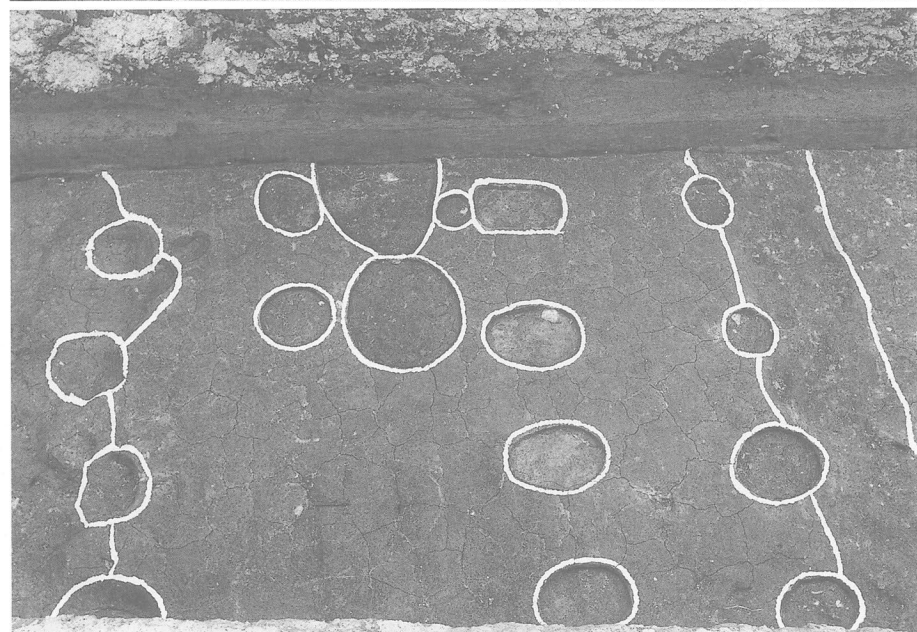
4 上層 全景（南から）



5 上層 西半 (西から)



6 上層 柱穴群 検出状況 (東から)



7 上層 柱穴群 (南から)



8 土坑 SK01 検出状況（南から）



9 土坑 SK01 断面（西から）



10 土坑 SK01 土器出土状況（西から）



11 溝 SD01 断面 (西から)



12 溝 SD08 断面 (北東から)



13 土坑 SK02 断面 (西から)



14 溝 SD09 断面 (東から)



15 溝 SD05 断面 (北から)



16 溝 SD06 断面 (南から)



17 溝 SD04・SD03 断面 (南から)



18 溝 SD10 断面 (南から)



19 溝 SD07 断面 (南から)



20 下層 全景 (西から)



21 下層 西半 (東から)



22 溝SD12 (東から)



23 溝SD12 (南西から)



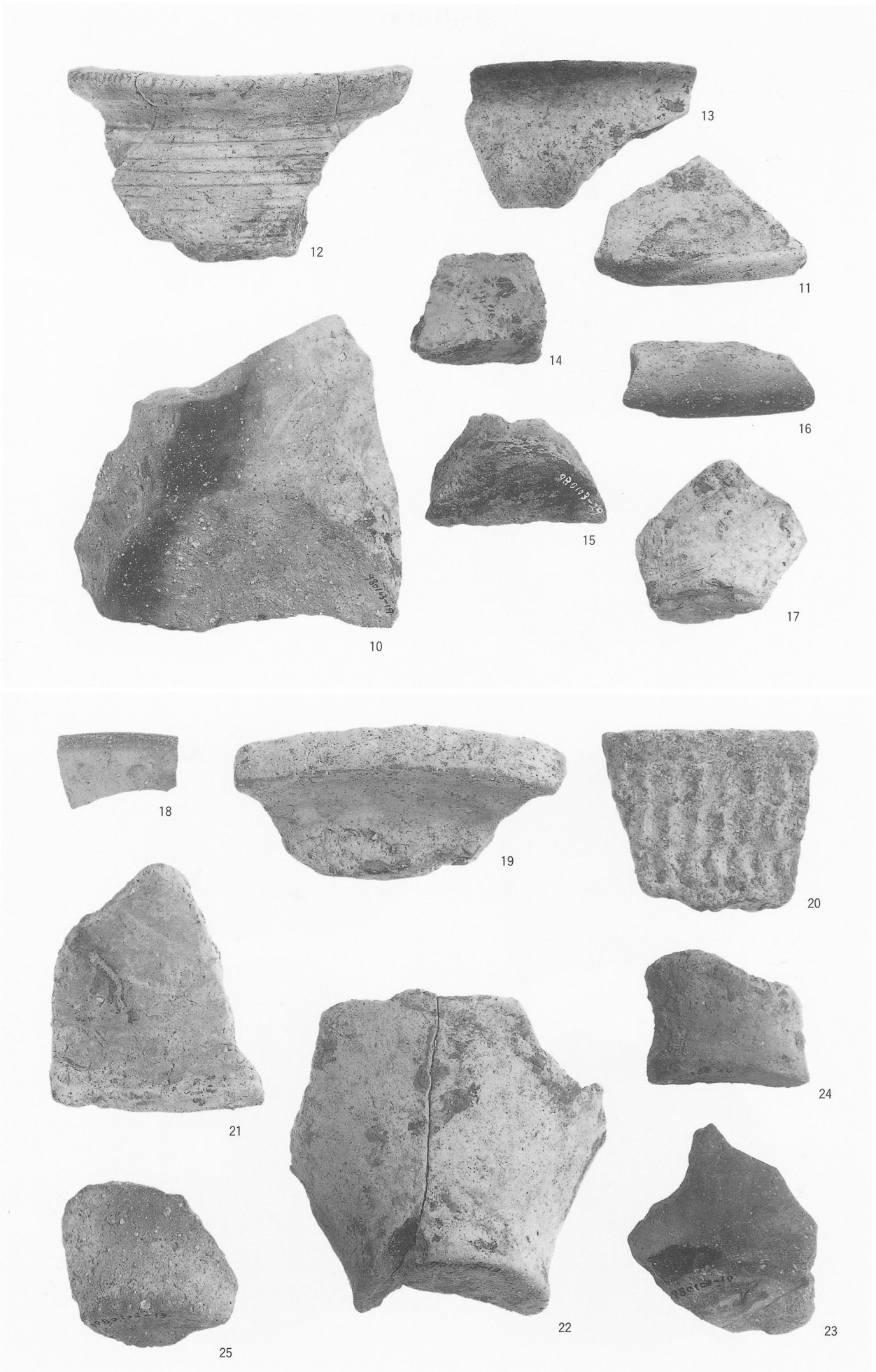
24 溝SD12 断面 (南から)



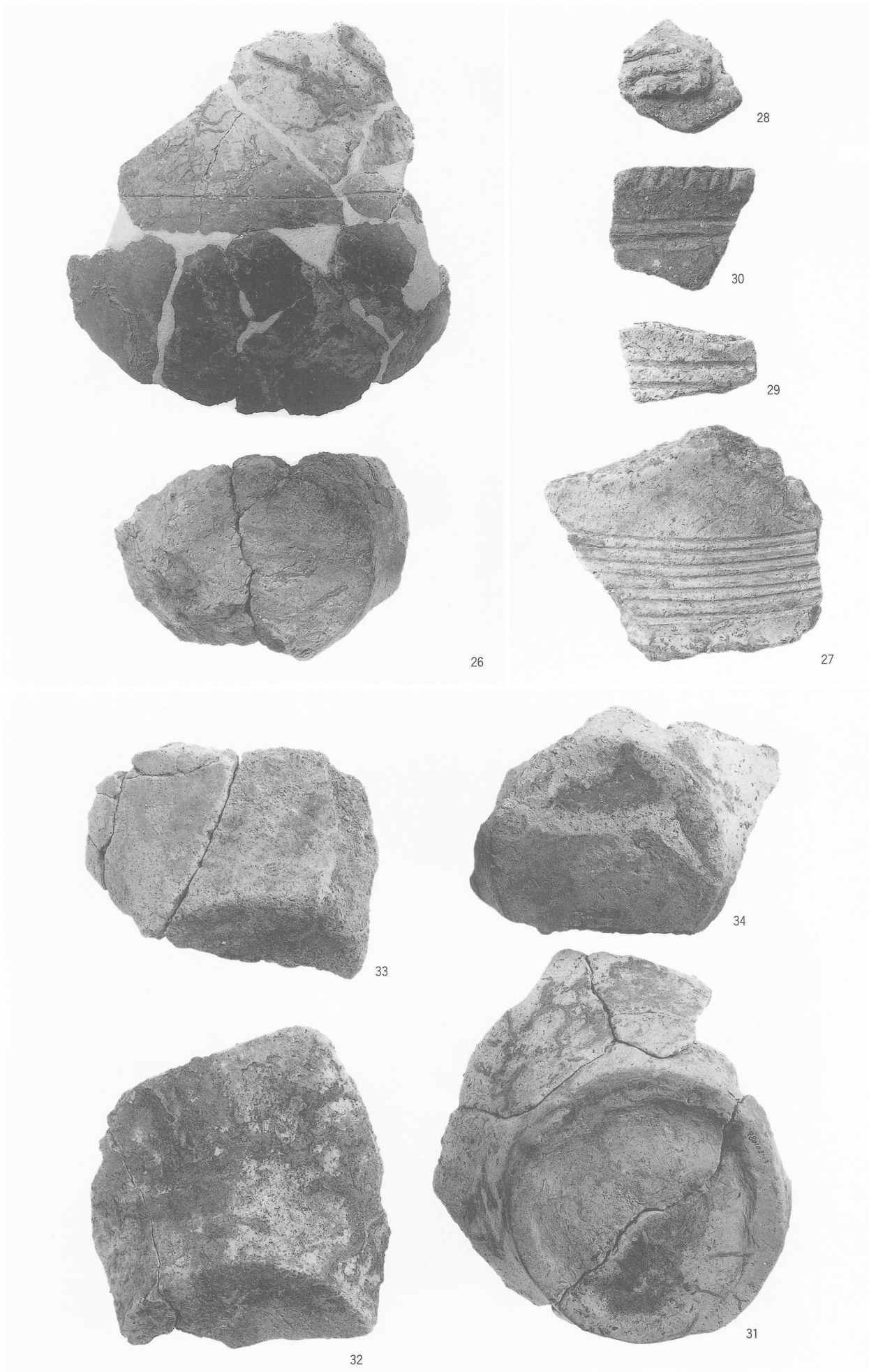
1

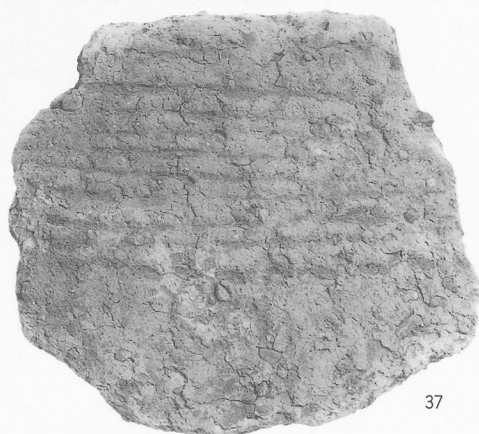


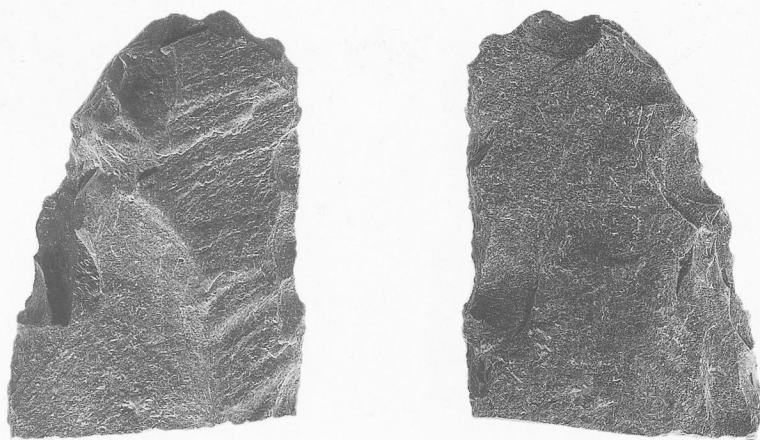
SK01・SD01・SD04・SD05・SD06出土土器



SD07・SD08・SD09・SD02・柱穴・包含層出土土器



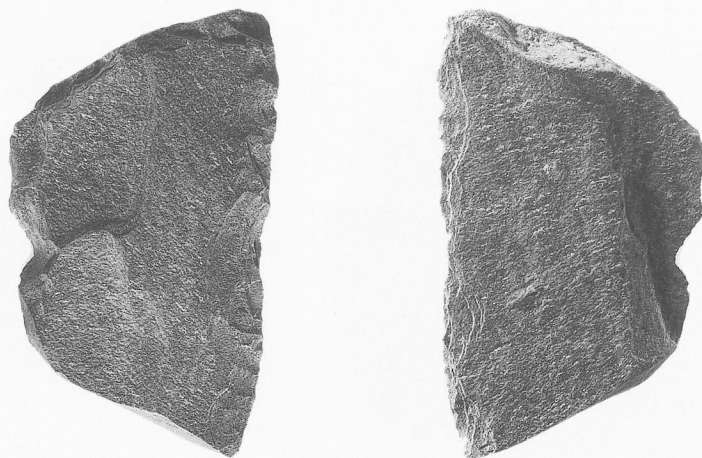




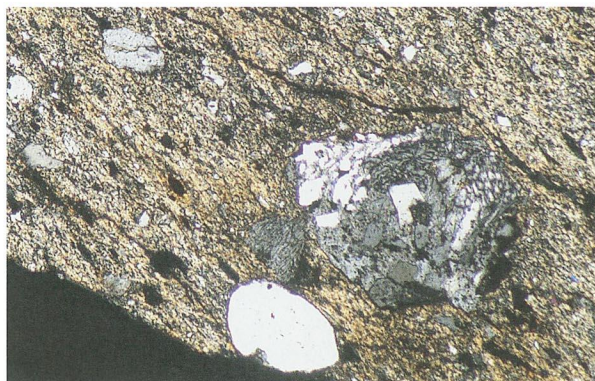
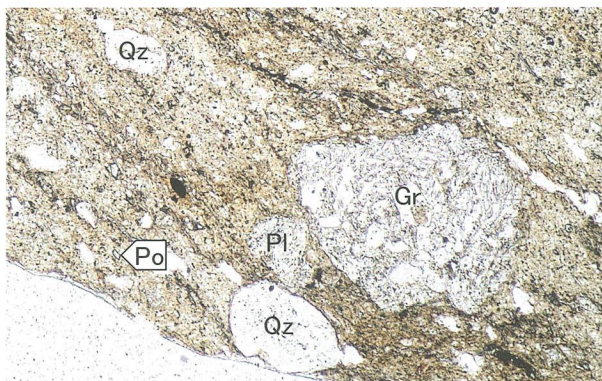
S1



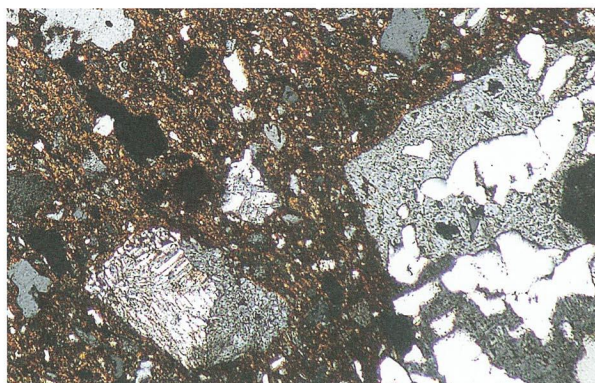
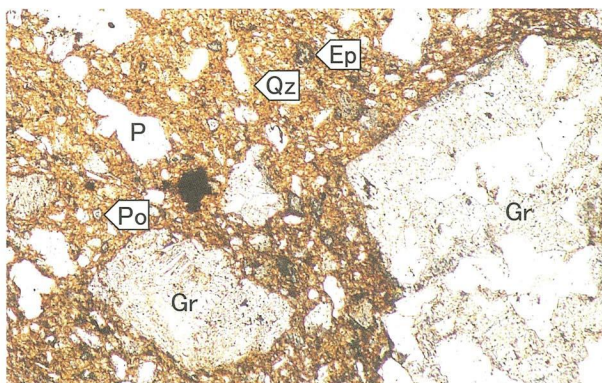
S2



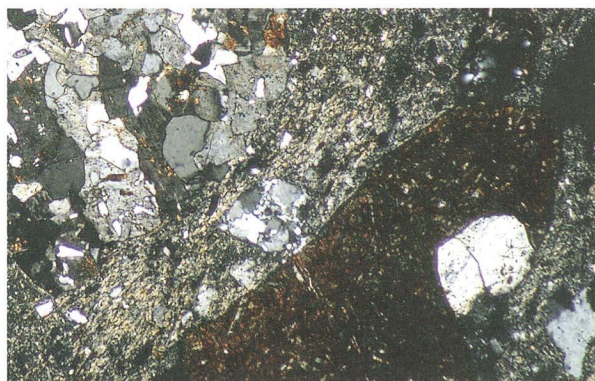
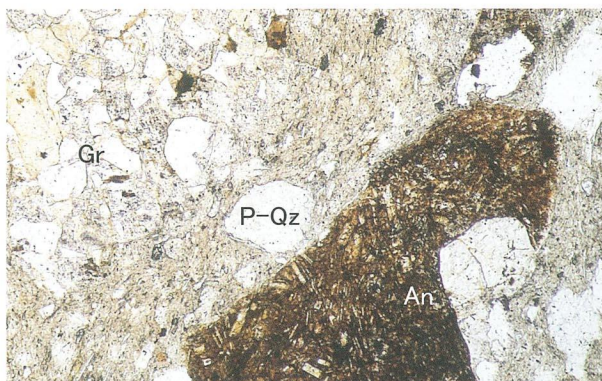
S3



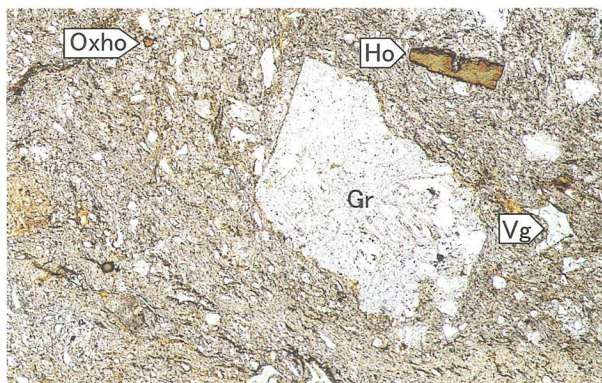
1. 資料 No.01 (報告 No.26 弥生土器 壺 弥生時代前期 SD12 980103)



2. 資料 No.02 (報告 No.27 弥生土器 壺 弥生時代前期 SD12 980103)



3. 資料 No.03 (報告 No.30 弥生土器 壺 弥生時代前期 SD12 980103)

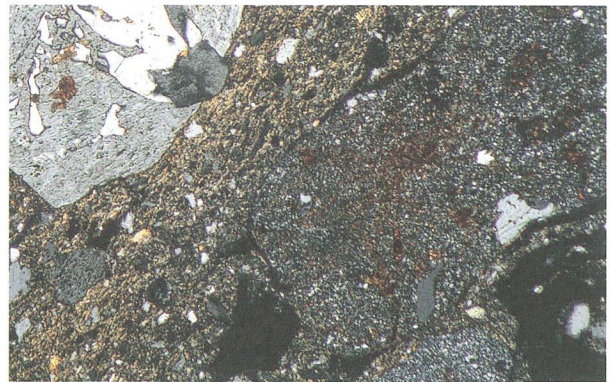
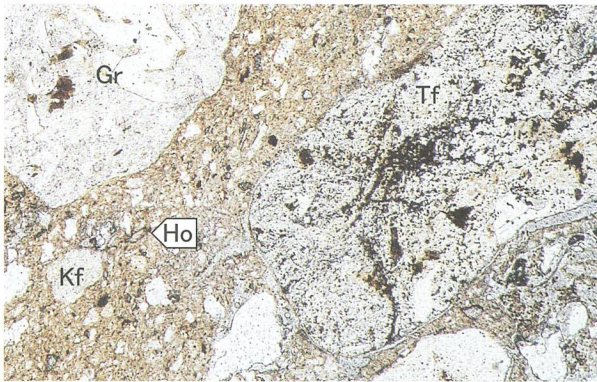


4. 資料 No.04 (報告 No.31 弥生土器 壺 弥生時代前期 SD12 980103)

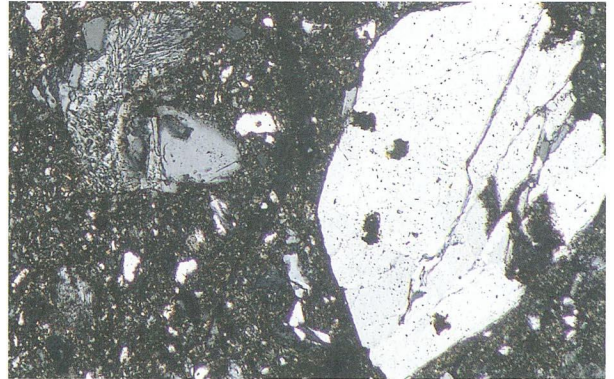
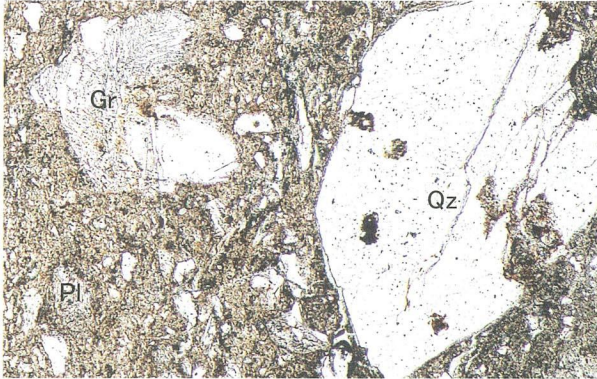
Qz: 石英, Pl: 斜長石, Ho: 角閃石, Ep: 緑レン石, An: 安山岩, P-Qz: 多結晶石英,
Gr: 花崗岩, Vg: 火山ガラス, P: 孔隙, Oxho: 酸化角閃石, Po: 植物珪酸体.

0.5mm

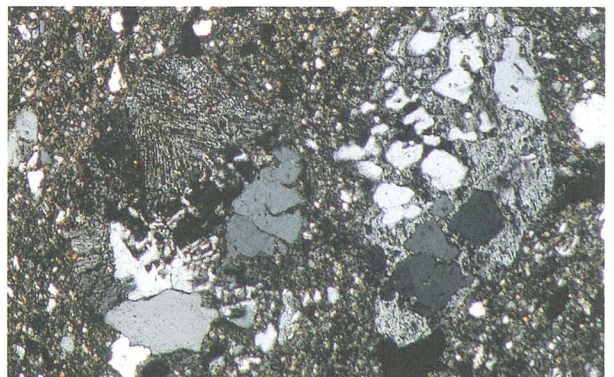
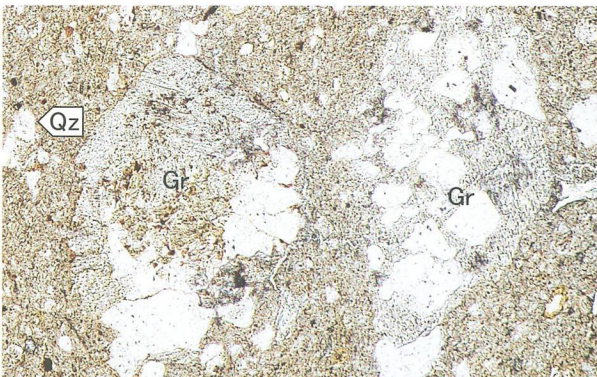
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。



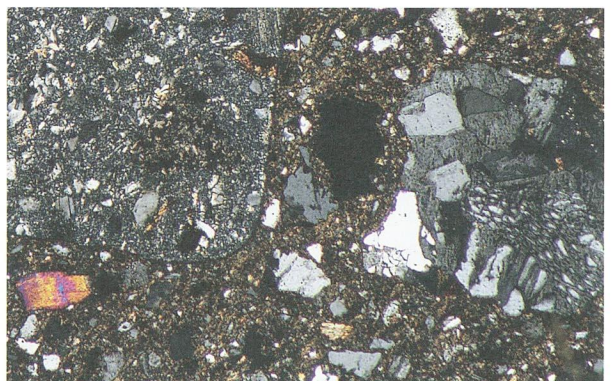
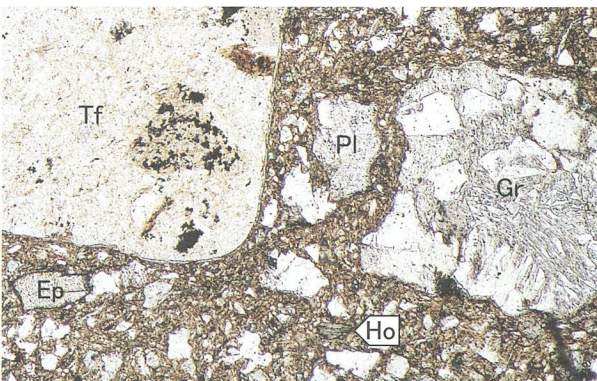
5. 資料 No.05 (報告 No.32 弥生土器 壺 弥生時代前期 SD12 980103)



6. 資料 No.06 (報告 No.33 弥生土器 壺 弥生時代前期 SD12 980103)



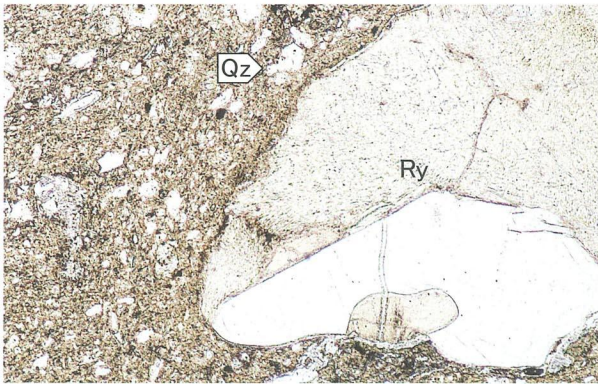
7. 資料 No.07 (報告 No.34 弥生土器 壺 弥生時代前期 SD12 980103)



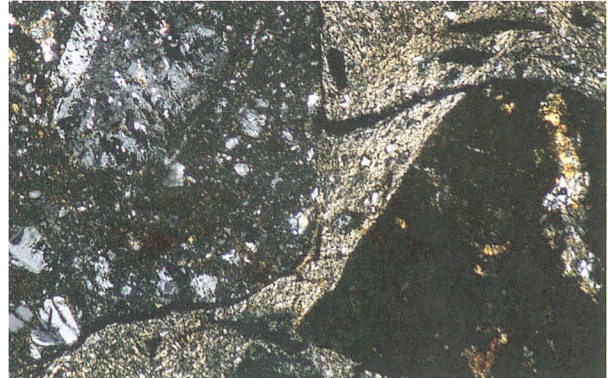
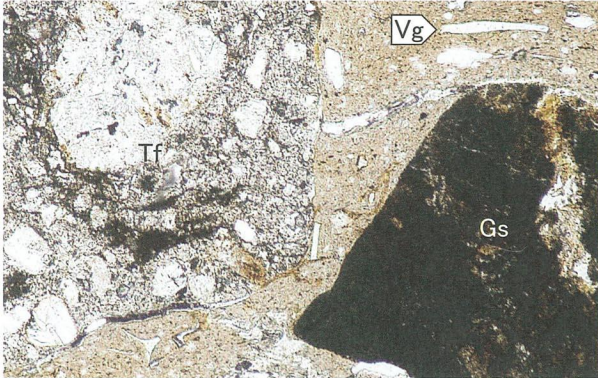
8. 資料 No.08 (報告 No.35 弥生土器 甕 弥生時代前期 SD12 980103)

Qz: 石英, Kf: カリ長石, Pl: 斜長石, Ho: 角閃石, Ep: 緑レン石, Tf: 凝灰岩, Gr: 花崗岩.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

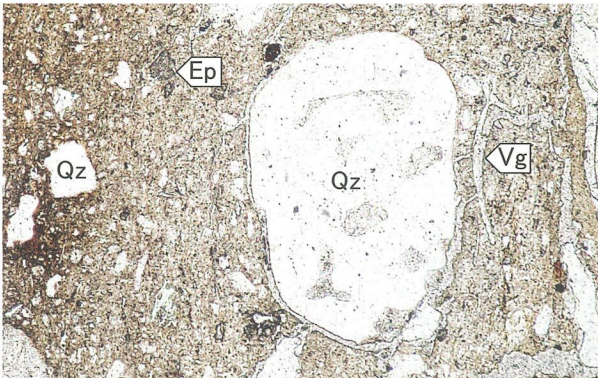
0.5mm



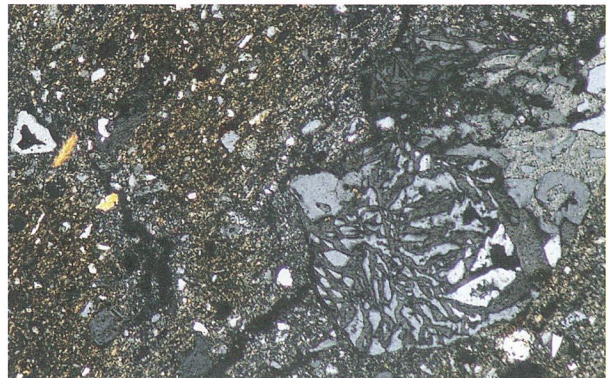
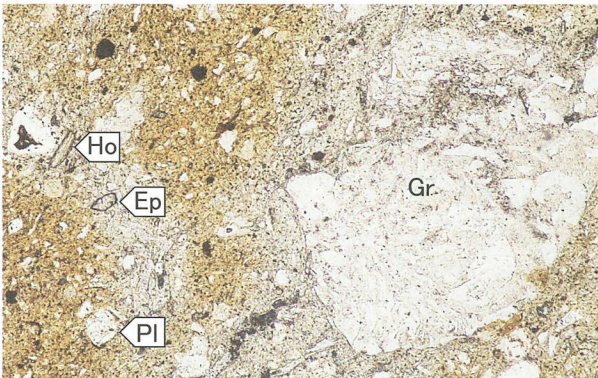
9. 資料 No.09 (報告 No.37 弥生土器 甕 弥生時代前期 SD12 980103)



10. 資料 No.10 (報告 No.38 弥生土器 甕 弥生時代前期 SD12 980103)



11. 資料 No.11 (報告 No.39 弥生土器 甕 弥生時代前期 SD12 980103)

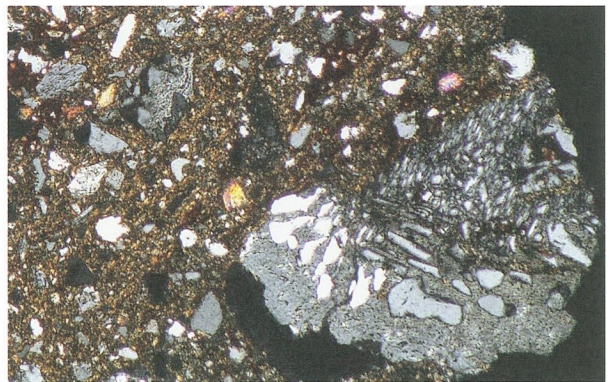
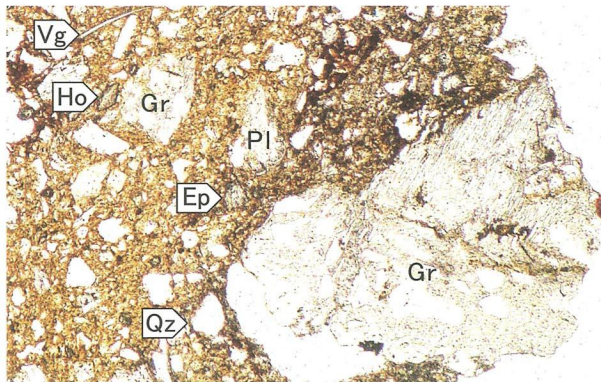


12. 資料 No.12 (報告 No.40 弥生土器 甕 弥生時代前期 SD12 980103)

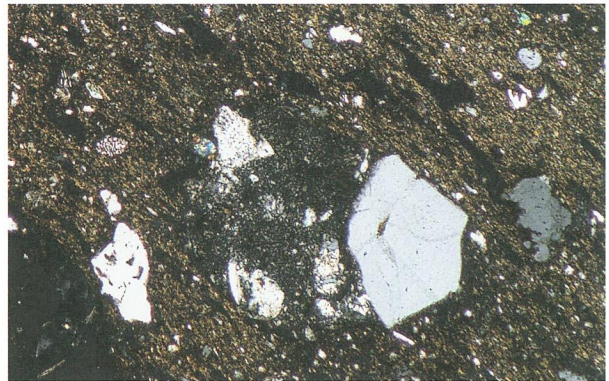
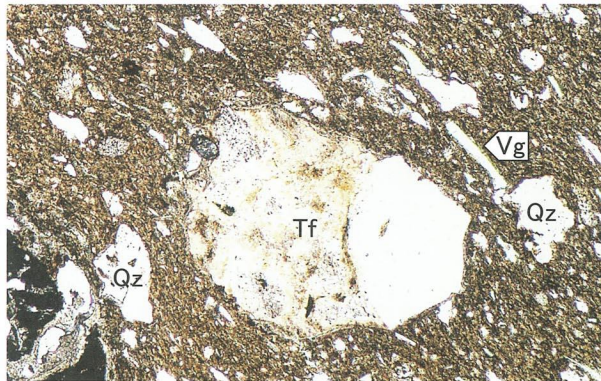
Qz: 石英. Pl: 斜長石. Ho: 角閃石. Ep: 緑レン石. Ry: 流紋岩. Gr: 花崗岩.
Vg: 火山ガラス. Gs: 綠色岩

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

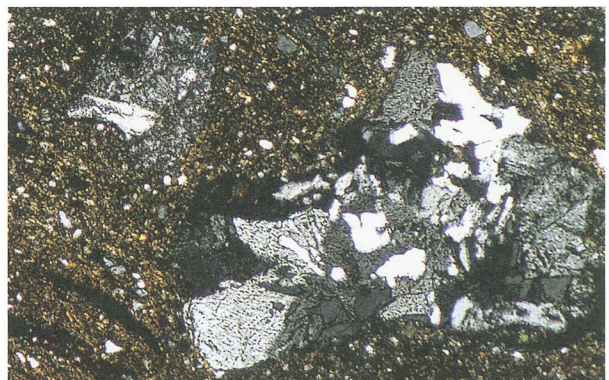
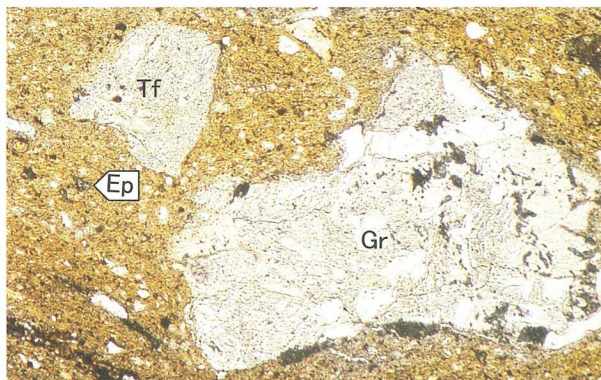
0.5mm



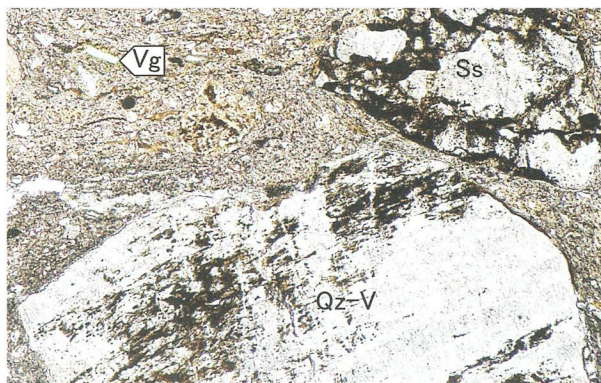
13. 資料 No.13 (報告 No.12 弥生土器 壺 弥生時代前期 SD09 980103)



14. 資料 No.14 (報告 No.13 弥生土器 甕 弥生時代中期 SD09 980103)



15. 資料 No.15 (報告 No.10 弥生土器 壺 弥生時代中期 SD07 980103)



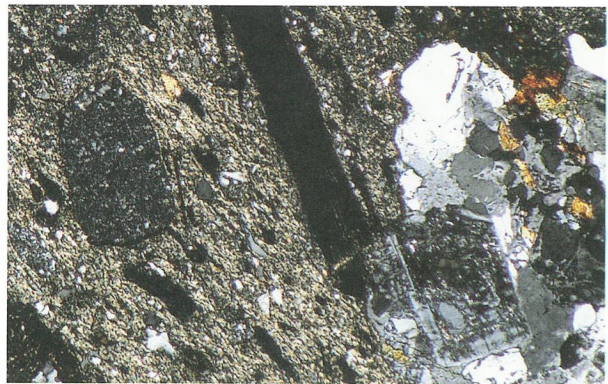
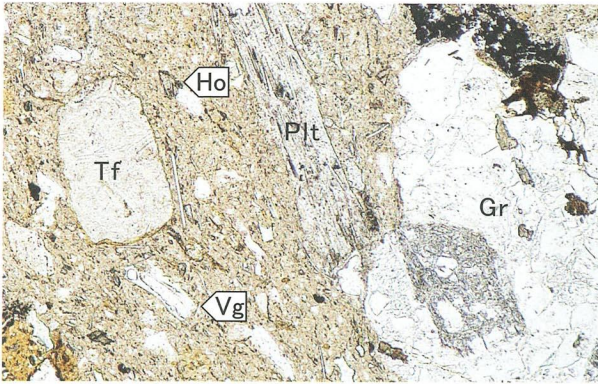
16. 資料 No.16 (報告 No.07 弥生土器 甕 弥生時代中期 SD06 980103)

Qz : 石英. Pl : 斜長石. Ho : 角閃石. Ep : 緑レン石. Ss : 砂岩. Tf : 凝灰岩. Gr : 花崗岩.

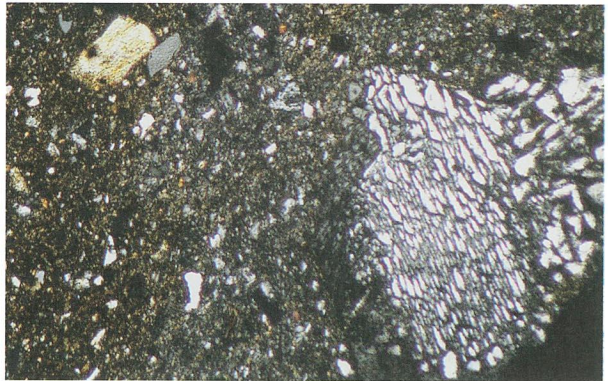
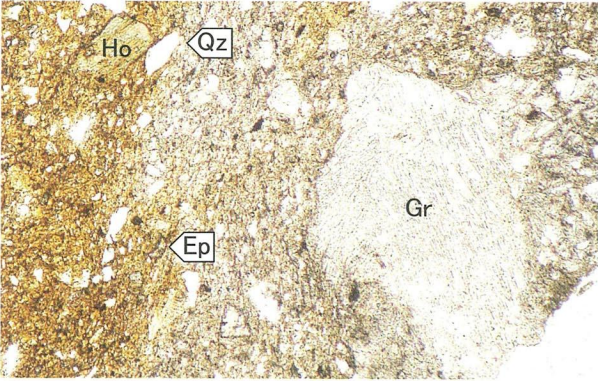
Vg : 火山ガラス. Qz-V : 石英脈.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

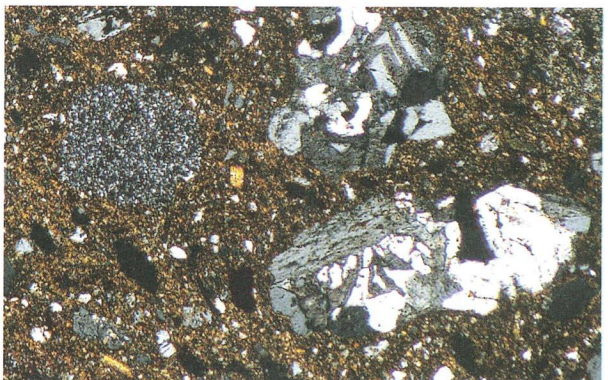
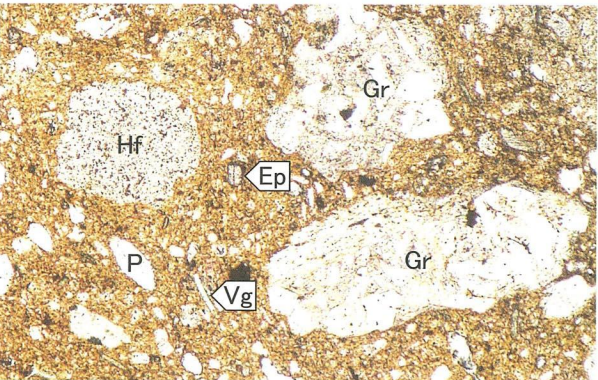
0.5mm



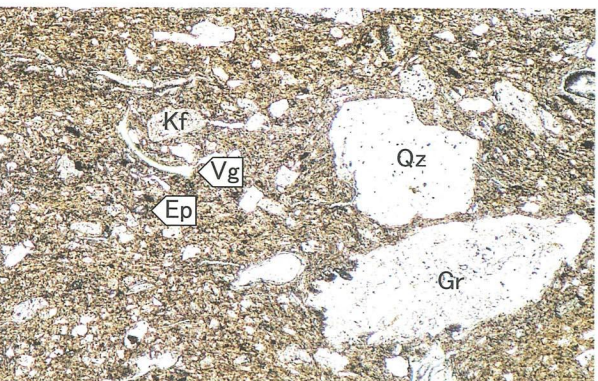
17. 資料 No. 17 (報告 No. 15 弥生土器 甕 弥生時代中期 SD10 980103)



18. 資料 No. 18 (報告 No. 19 弥生土器 壺 弥生時代中期 包含層 980103)



19. 資料 No. 19 (報告 No. 21 弥生土器 蓋 弥生時代中期 包含層 980103)

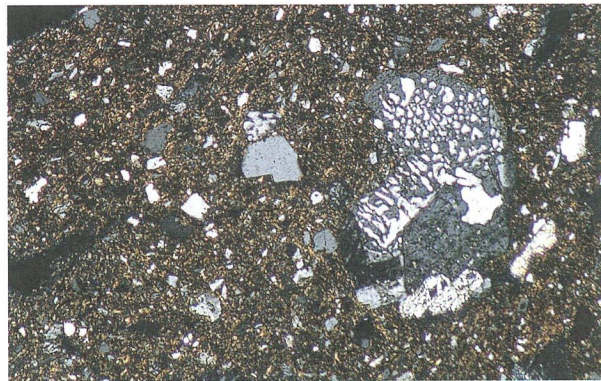
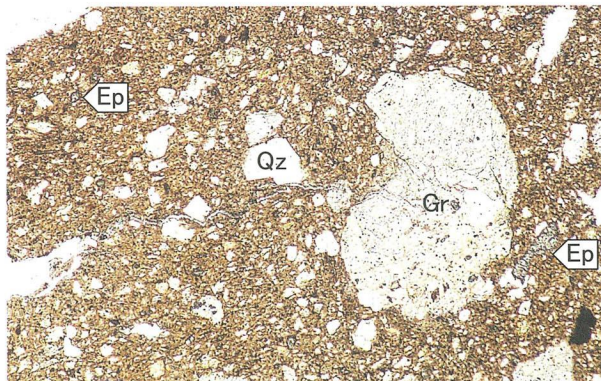


20. 資料 No. 20 (報告 No. 22 弥生土器 甕 弥生時代中期 包含層 980103)

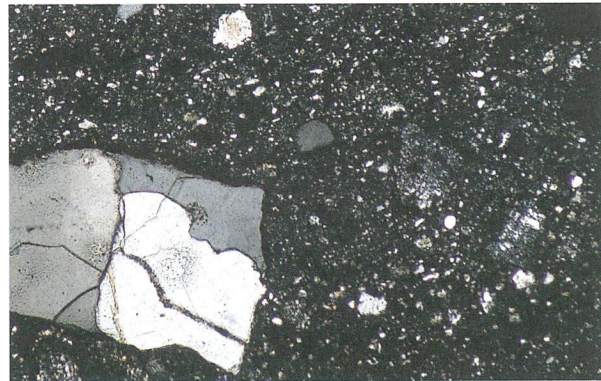
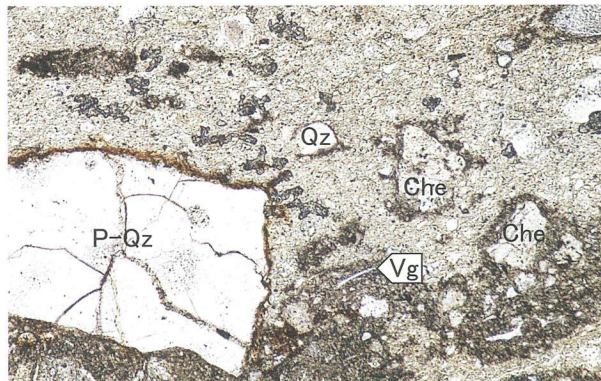
Qz: 石英, Kf: カリ長石, Ho: 角閃石, Ep: 緑レン石, Tf: 凝灰岩, Gr: 花崗岩.
Hf: ホルンフェルス, Vg: 火山ガラス, P: 孔隙, Plt: 植物片.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm



21. 資料 No.21 (報告 No.23 弥生土器 甕 弥生時代中期 包含層 980103)



22. 資料 No.22 (報告 No.1 須恵器 壺 平安時代 SK01 980103)

Qz: 石英. Ep: 緑レン石. Che: チャート. P-Qz: 多結晶石英. Gr: 花崗岩. Vg: 火山ガラス
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

土器胎土薄片 (6)

兵庫県文化財調査報告 第350冊

丁・柳ヶ瀬遺跡Ⅱ

都市計画街路網干線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成21年3月18日 発行

編集 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500

TEL 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 交友印刷株式会社

〒650-0047 神戸市中央区港島南町5-4-5
